ビブリア

No. 45

福島高専 図書館報

発行　いわき市平上荒川字長尾30
　　福島工業高等専門学校
編集　図　書　委　員　会
　　昭和56年12月2日

◇巻頭言◇

青　春　と　本

図書委員　土木工学科　高　橋　邦　雄

20年の月日を生きて来た本校の大樹「けやき」も，いま，その葉を一枚一枚落とし，初冬の青空に向かって少し寒そうに立っています。

いつも，今頃になると五年生の諸君が就職試験に出かけますが，特に二次の面接試験に行く前に話題になるのが，会社等で問われる「最近読んだ本は？」「君の愛読書は？」についてと，「青春，人生とは何だろうか？」という問い掛けです。

そこで，前号のビブリア（No.44）の「道しるべ」にある鈴木君（本校五年）著の闘病記「青春の樹」を再掲します。

闘病生活という特殊な体験のため，一般の学生には全く別な青春の側面かも知れませんが，「青春とは，人生とは」と五年の高専生活をふり返って真剣に考える，この時期の五年生の姿に相通ずるものがあると思い，あえて掲げてみました。

私も22才の春「縦隔胴腫瘍」という病気（手術時間7.5h，総輸血量8000cc）で入院し，死と闘い，死を直視して，生きることを真剣に考えた時があります。私がこの入院生活で体験したことは，人間が真剣に生きることを考え，人生を考えた時，たった一冊の本，ほんの数行の言葉がどれほどの生きる支えになったかということであります。明日という日が無いかもしれない，そんなせっぱ詰まった気持が，今日この本を読んでしまおうとさせたのかも知れません。

それは，「青春とは？」「人生とは？」と真剣に考えているこの時期の五年生が，より豊かな学生生活を，はちきれる青春を送る為に，本をむさぼり読んでいる在校生が，良い本とめぐり合い，自分の学生生活の支えとすることに似ていると思います。この本とこの本を読めばという読み方ではなく，学生時代に青春の一時を何か一種の緊張感で本を読んでみるのも，今までになかった自分を見つけられるかも知れません。

そこに「青春とは？」の答もあるでしょう。

目　次

巻頭言　青春と本 …… 高橋邦雄　1
二つのメモ …… 鈴木行雄　2
僕の読書観 …… 石崎文彦　2
読書の持つ価値 …… 村上新一　3
日本　その人と社会とを考える …… 4年生　4
古きを温ねて新しきを知る …… 4年生　8
世界文学への小さな窓（続） …… 1年生 11
道しるべ …… 20
友達にも読ませたい本 …… 2年生 21
学生諸君の要望にお答え …… 館長 24
新着図書目録 …… 25
寄贈図書紹介 …… 28
読んでみませんか …… 28
当館の歩み …… 28

2つのメモ

数学科　鈴木行雄

1. ラスカルの自然
2. デカルトの魅力ある言葉1つ2つ
デカルト(Ren'e Descartes 1596～1650)

1. ラスカルの自然

人と動物との交流の話は面白い。おそらく人間の側の人間性とそれに応える動物側の能力に私たちは驚き且つよろこび，それが強い感動となることによるのであろうか。

エルザが自分の三匹の子供を見せに来る情景などこれがライオンなのかと思う程である。

これとは違うが，なつかしく想いだされるものに「はるかなる　わがラスカル」(角川文庫，亀山訳，原名 Rascal，by Sterling North)がある。利口なあらいぐまラスカルが主役であるが，同時にスターリングノースの少年時代が北米五大湖附近の自然をバックに語られていて，一種郷愁に似たものがはしるのである。世界一美しい冷瀧たるスペリオル，松のにおいが満ち落葉の堆積が脚につたわる感じで眼前にすばらしい針葉樹林が展開するのである。

ラスカルは，こんなすばらしい自然に帰って行った。自然の中においてこそ幸福であろうという考えとともに，いつまでも精気を湛えた自然であることをねがうのである。

2. デカルトの魅力ある言葉1つ2つ

人には迷いはつきものである。

デカルトはこのことについての心構えを三つの格率（自分に課した道徳律）としてあげている。これは彼の哲学の完成のため自らに与えた規律と考えられる。

Ⅰ　幼少の時代から受けた教育・しつけ・宗教を大切にしながら，共に生きてゆかなければならない人々のうち最も分別ある人たちの穏健な意見に従って自分を導くこと。

Ⅱ　行動においては，きっぱりした態度をとること。ペースを守って進むこと。

Ⅲ　自分にうちかつことに力(つと)めること。

（私たちが支配し得るものは自分の思想，自分の自由意志しかないという理由によって)(方法序説第3部)

この格律は行動の指針であり，次にあげるのは打ちたてようとしている哲学の有名な第一礎石である。「私は考える，故に私はある」(Je pense，donc je suis.）これを確実な真理として哲学の第一原理においている。（すべては偽である，と考えている間もそう考えている私は必然的になにものかでなければならぬ。）この第一原理を出発点として建築したもののうち，その1つのモデルが，座標による幾何学であって，多くの数学の教科書にその名前と肖像とがのっている。（方法序説第4部）

又，情念論第3部に高邁な精神の定義がある。「高邁」とは自由な自己，自由な意志をよく用いようとする（悪く用いるのでなく）確固不抜の決意を感ずることだとしている。

参考になるように思う。

僕の読書観

学生図書委員　2C　石崎文彦

僕は小さい時から一つの習慣をもっている。それは寝る前に何か一冊の本を読み切ることである。この習慣は悪い点と良い点とがあり，両方の影響とも僕は受けてしまったようである。例えば前者については，視力低下の問題であるが，これは必ずといってよい程起こる問題のようである。特にねむりにつく前なので床についたまま本を読むことが多く，そのことから姿勢をくずしてしまい，それが視力低下につながっているようである。後者については，本から受ける知識のことである。どんな本でも必ず，多かれ少なかれ豊かな知識を与えてくれるが，どれをとっても無駄になることがなく，かえって役に立つことの方が多いといえる点である。

読書の長所短所はともかくとして，とにかく僕は小さい頃から，自然と読書のおもしろみを感じてきたことだけは確かである。初めの頃はまだ小さかったため，

伝記や簡単な物語などの文芸作品を読んでいたが，意外とこの手のものは字が大きくても本が厚いせいもあり，読むのに少し時間がかかり，前にも述べたように視力を大幅に低下させてしまった。そこで，1時間から30分程度で読める短編集やジョークの本を読みはじめたのである。この手の本は確かに寝る前に読む本としては不足がなくそれなりの満足感を与えてくれた。しかし，この寝る前に読む本から受けた影響は大きく，そのために，普段のときの読書傾向さえも大きく変わってしまったのである。はじめの頃は，それで十分満足していたのだが，次第にそれらの本では物足りなさを感じるようになり，しまいには自分の思考回路が鈍ってくるようにさえ感じてしまった。結局その手の本はあまり良い影響を与えてくれないことに気づかざるをえなかったのであろう。

しかし，逆にいえば，僕に，真の読むべき本は何であるかを教えてくれたという点ではそれなりの効用はあったようである。

本とはなにか？。小さい時には，我々に楽しみを与えてくれる存在で十分であった。しかし，今ではそれは僕にとっては，楽しみを与えてくれるもの，知識を与えてくれるもの，そして感動や物事について考えるきっかけを与えてくれるものとしてなくてならないものとなっている。一つのものごとによってさえも精神が大きく左右される今この時，我々にとって本というものは，知識を与え，さらに，深くものごとを考えさせる存在でなければならないと思う。

読書の持つ価値

1E　村　上　新　一

私は，10月の或日，学校の帰りに本屋へ立ち寄った。その日も，私はいつものように，自分の心をぐっと引きつけるような本はないかと，本棚に縦にきちんと並べられ，整理されている本を，一冊一冊取り出しては，その裏表紙に本の内容が簡単に書いてあるのを読んでいた。しかし，なかなか自分の気に入った内容の本が見つからなかった。ちょうど私は，以前に別の本屋で石川達三著の「青春の蹉跌」という本を，買おうか，買うまいかと迷ったあげく，結局，それを買わないでしまったことを思い出した。それから，私はその本を本棚に捜して，それを見つけて取り出し，その裏表紙を再び読んでみた。その裏表紙には，次のようなことが書いてあった。

「生きることは戦いだ。他人はみな敵だ。平和なんてありはしない。人を押しのけ，奪い，人生の勝利者となるのだ。貧しさゆえに充たされぬ野望を持って社会に挑戦し，挫折した江藤賢一郎。成績抜群でありながら専攻以外は無知に等しく，人格的道徳的に未発達きわまるという，あまりにも現代的な頭脳を持った青年の悲劇を，鋭敏な時代感覚に捉え，新生面を開いた問題作。」

私は，高専の学生であるが故に，この

「成績抜群でありながら専攻以外は無知に等しく，人格的道徳的に未発達きわまる。」

という言葉を見逃すわけにはいかなかった。それで，私はこの本を買って家に帰り，さっそく読み始めた。

この本を読んでの感想を次に羅列する。

主人公江藤賢一郎の非人情さに，私は憤慨した。本当の愛というものを，この男は認識していない。地位や名誉を築き得るために愛や結婚があると，この男は思っているのである。愛は，互いに通い合う思いやりの心が最も大切なことであって，それ以外の何物でもないではないか。また，この世の出来事をすべて法律で解決できる，法律を自分の味方にさえすれば万事大丈夫であるなどと考えているこの男を，私は嘲笑してやりたい。また，人情という，この上なく美しくすばらしいものを法律で解決しようとするこの男の態度には，腹立たしいものを感じないわけにはいかなかった。

ところで，私は高専の学生である。段々上級にいくに従って，電気を専門に学習していくことになる。他のことには見向きもしないで，ただがむしゃらに電気だけを学習していったら，私は，「青春の蹉跌」の主人公である江藤賢一郎のような人間になりはしないだろうか。電気以外のことは全く知らない，人間味のない冷たい，そして，自分の目先の利益しか考えないような人間になってしまうのではないだろうか。そう思い考えただけでもぞっとするのである。確かに人間は，エゴイズムのかたまりである。しかし，人間はそのようになってしまっては，もうおしまいである。情なくして人間の社会などあり得ない。そこに，読書をすることの大切さ，重要さがあるのである。

このように，読書は，己の無知をなくしてくれる。無知であることを知らずにいるのは，恐ろしいことである。前期には，いろいろな小説を読んで，いろいろ

なことを教訓せられ，また，考えさせられた。しかも，それは，これから私が人生を歩む上での，重要な参考となるものである。今，読書の重要さ，読書の持つ価値を改めて認識した私は，後期からは，人間味のある文学を数多く読んで自分の精神を高め，その他，人生に役立つ本を数多く読んで，知識・教養を高め，自己の無知をなくしていこうと決心した。人間味のある，暖かい，思いやりのある，そして情のある人間を理想とする私としては，特に文学にアクセントをおいて，これからも充実した読書をしていきたいと思っている。

日本——その人と社会とを考える

倫理哲学科（芋川教官）の課題読書から

日本人の意識構造（会田雄次）

（講談社現代新書）

4土　川島　優

この本は全体的にアメリカ・ヨーロッパ人と日本人との比較があまりにもあてつけがましく書いてあるところがありまして，読んでいて時折不快感を覚えました。まあこれはわたしだけに言えることかもしれませんが……。とにかく，あまり人には勧めたくないような本です。まあ，この本でもそう日本人を初めから終りまで馬鹿にしているのではありませんが。

わたしの読後感というかこの本に対して思ったことは，日本人というのはこういう民族なんだから悪い点は悪い点で素直に認め，それを補ってありあまる日本人の長所というものをだせばよいというようなことを言いたかったのだと思います。

さて，この本はタイトルにもありますが，「日本人の意識」というものを風土・歴史・社会という三つの角度からながめています。そしてあるときは賛同し，またあるときは批判しています。多くの場合は批判していますけど。しかし，それは逆に見ればそれが日本人の長所ではないのだろうかと筆者自身がそう言いたそうに書いています。その辺が唯一のこの本への，筆者への好感でした。

三つの角度と書きましたが，そんな意味でこの本は大きく３つの章に分かれています。「日本人の意識構造」，「日本人的日本人」，「日本人の精神的原点」の３つです。

第１章，「日本人の意識構造」では初めに書いたように諸外国の民族と我々日本人とを比較し，日本人のその逆さまの行動とはどこから来ているのだろうかというような事が書いてあります。逆さまの行動とはもちろん諸外国の民族のそれと比較してのことです。例えば親が危険から子どもを守る場合，西欧では一般に親は子どもに背を向け危険に立ち向かうそうですが日本ではほとんど例外なく危険に背を向ける，というようなことです。

第２章，「日本人的日本人」の中においても，全体の流れとして日本人って何て不思議な，独得な性格なんだろうかと言いたそうな感じが多分にありました。やはり第１章と同じように比較されながら。ただ，日本人は劣っているというだけでなく他の民族と比較して他の民族にないいい面というか，独得なもの，日本の文化というものを，それはそれなりにあるいはたいへんすばらしいと書いています。この第２章では「世間体というもの」という項目があるのですがその辺が面白かったように思います。

第３章，「日本人の精神的原点」というタイトルで約20ページ程の中で日本人の精神的原点はここだというような論をいくつか簡単にまとめてあります。そしてかなり無理な理屈でひとつの結論に達しています。まあ，考えられるひとつの結論であると思いますが。

ここまで，ざっとこの本の紹介というようなものをわたしの多少の意見を入れて書いてきましたが，そうですね，わたしは日本人じゃないよという目で読むなら面白いかもしれません。

ところで，第１章のはじめに日本人はうつ向きの姿勢であると書いてあります。日本人は昔から大地に向かって鍬ばかりふるっていたから，いざとなると鍬をふるようになるのであろうなどと身勝手な解釈をして

いるアメリカ人もいるとも書いてありました。確かに新鮮な着想や新しい角度からの発想であるとは思いますが，反論したくなります。またこのうつ向きの姿勢というのを前にも書いたように親が子どもを守るときの姿にあらわしています。そういう意味で，日本人という民族のその性格を指摘している文章を少し抜きだしてみましょう。

「ヨーロッパ人にとっては，平和というものははっきりと建設するものなのである。平和は日々建設していかなければならない。その姿勢は外界に応じ，たえず変化をしなければならぬ。そうでない限り，平和は崩壊し，戦争になってしまう。つまり存在ということは，日本人の場合は現に「ある」のであるが，向こうの場合は「作る」のである。（中略）日本人は自分の決断でさえ自然発生的と感じる。「どうしたんだい」というと，「こうなったんだよ」と答えるのが私たちだ。責任回避の常習者の慣習的発言だとも言えようがむしろ日本人の民族的特徴であろう。つまり消極的態度であり，自然存在論的思考である。……」

この文は「作る平和とある平和」という項目の中に書いてあります。言わんとするところは，歴史的条件の違いがそういう観念（平和に対してでさえも）を造ってきたのではないのかということだと思います。

また第1章にもうひとつ，「マラソンと短距離」という項目があります。本文を抜き書きするには少し長いのでここには書きませんが，つまりこういうことです。日本人というのは最初に言ったようにうつ向きの姿勢であり，人間自身の心理というのも内側を向いているということです。そして内側を向いている精神的特徴として，目の前にある，すぐとどきそうな目標に対しては非常にうまくいくと言っています。それは日本人の長所，非常な長所であるかも知れないとも言っています。この章ではやはり日本人の意識というものを客観的にとらえ，筆者の思うところを自由に書いていると思いました。読み方如何では面白いだろうし，ためにもなると思いますが，ただ前にも言ったようにあまり人には勧めたくありませんが……。

第2章の中に「世間体」という項目があります。これがこの本の中では最もわかりやすく日本人の意識について書いてあります。例えば，娘が中学出の男と結婚すると世間に恥ずかしいとは親類・縁者だけを全世界と考えるその世界の「せまさ」のように。ここで望まれることは，わたしたちが，この世間をもう少し広く意識するようになるということであると思います。そして，自分自身が毎日具体的に接触する社会だけを世間と考えず，自分たちの集団と異質な，つまり価値観を異にする集団がたくさん存在していることをはっきりと自覚するということです。

日本人は独得なせまい社会しか見ない，いや見えないということをうまく説明しているように思います。

結局，前にも書きましたが，読み終えて感じたことは，やっぱり日本人は日本人でしかないということです。そして何よりも精神を外側に向け，大きな目標を常に持っていなければならないということです。現在のわたしたちがそうすることによって，日本人の意識構はもっと高次元のところまでいくのではないでしょうか。現在のそれが歴史的につくられてきたように。

タテ社会の人間関係（中根千枝）

（講談社現代新書）

4C　佐藤　浩幸

はじめに，何故この本を選んだのかを記しておく。本屋の新書版のコーナーで，数ある中一番最初に見つけたからである。一番最初に見つけたということは，この書名に引かれるものがあったのだろう。そして，著者が女性であったことも挙げられる。これは私の独断かもしれないが，こういう類の本は著者が男性より女性であった方がわかりやすいのではないかと思ったからである。また，本をペラペラとめくってみると，内容が各章・節に分かれているばかりでなく，話しの切れ目・内容の変り目に見出しが出ており，その見出しだけでも内容が想像つくしわかりやすいと思ったからである。

「タテ社会の人間関係」この題から想像したのは，よく社会派小説といわれる小説や人間ドラマと題するテレビドラマのように，どろどろして醜く汚い人間と人間の心の葛藤を取り挙げ，そこでなにかを示唆するのだろうということであった。

私は，こういう類のものを読んだり見たりするのが好きである。タテ社会の中で，上の者があまりに権力を振るいすぎるとか，下の者が上の者を食いつぶすとか，こういうことは自分の身の辺りによく起こっていると思う。私自身もそうであるが，人は実際にそういう渦の中にいると，自分を正統化してしまい普段の自分と変わりないと思っているが，結局人間の本心ともいうべき醜さ汚さを知らず知らずのうちに出してしまうのだろう。私は，こんな人間の心の変り方や渦の中の人間の行動や考え方を見るのが好きなのである。

しかし，読んでみると期待はずれの感があった。人間の心の様子を描いているのではなく，日本におけるまた外国と比較しての上下関係（また横関係）の社会状態を，またその中の日本人の言動を描いているのである。ようするに表面上のことであって，人間の心の奥がどうのこうのということを記述しているのではなかった。

本書は，今から二十年近く前に論文として発表され多くの読者から反響があり，著者は多く講演を依頼され，昭和四十二年に新書の型で発行されたものである。

私はこのことはうなずけるような気がする。確かにこの論文は今から二十年近く前に書かれたものであるが，内容は今の時代の枠にきちりとおさまってしまうからである。今の時代にも当てはまるということは，当時としてもかなり正確に又高度に当てはまっていたのだろう。

本書の内容でおもしろかった箇所を二三取り出してみたいと思う。

日本人が外に向かって（他人に対して）自分を社会的に位置づける場合，好んでするのは「資格」より「場」を優先することである。エンジニアであるということよりも，まずA社ということである。また，他人がより知りたいことも「場」であって「資格」はその次ということである。実に，私もそうだと思う。これは今の風潮かもしれないが，自慢する会社に入れたのは自分の能力すなわち「資格」であるから，もう少し「資格」を大切にすべきだと思う。

また，会社などに「ウチの者」「ヨソの者」の差別意識があり，「ウチの者以外は人間にあらず」というような感がある。たとえば，知らない人だったら突き飛ばしても席を獲得したその同じ人が，親しい知人（特に上司）に対しては，自分がどんなに疲れていても席を譲るといった滑稽な姿がみられるのである。実に日本人を象徴している行動だと思う。日本人は常に損得を考え，得する方へ得する方へと行動する。そのためには，多少の犠牲を顧みないのである。私もその日本人を代表する行動を無意識のうちにしてきたような気がする。もう少し冷静に回りを見る目を養いたいものだ。

その他にも，同等の身分・資格者にも序列意識があるといったように「ヨコ」に「タテ」の関係がくい込んでいるとか，リーダーは一人に限られ，交替が困難であるとか，破局の結果は「乗っとり」か「分裂」かであるとかなど，うなづける箇所が多い。

著者は，当時の日本の現状と日本人の考え方を鋭く描き，日本のまた日本人の今後のあり方を示唆したのだと思う。しかし，本書が書かれてから約二十年後の今の時代もその状態があまり変りないということは残念なことである。私は，本書の内容は，私が気がつかなかったこと考えが及ばなかったことばかりだと思う。潜在的意識があったから，新鮮な感じというのではなく，うなづくことが多かった。全く新しい知識を得るのでなく，一皮むいた所にある知識を得るという感じで，かえって読む楽しさが多かった。

私は，今の時代にあまり不自由を感じてないし，ある程度社会に順応して生活している。しかし，今の社会は何もかもが最高とはいえないと思う。社会のあり方にしても，人間の関係にしても，著者の理想としているものへ少しでも改善すれば，それに近づくと思う。著者の理想は，人間に潜在しているものだから，可能性は充分にあると思う。

日本の思想　（丸山真男）

（岩波新書）

4土　阿部　光夫

日本には思想，というより精神史が果たしてあるか，というのが確か第一部の出だしに書かれているものだったと思う。日本人は思想というものを元来持ち合わせていない民族なのではないか。

もちろん極端な言い方であるが，作者の言うところを聞くと絶対そのようなことを言っているように思えてくるので仕方がない。日本人だけが独自に持たなくてはいけない，思想の中心に構えて動かしようのないもの，いわく日本における思想的座標軸の欠如であるという。ヨーロッパにおけるキリスト教の様な意味の伝統あるいは哲学史に名を残す〇〇主義とかいう，少なくとも思想において民衆を統一していたもの（思想においてとはいっても，思想が宗教の持つ幅広い意味の様に生活全般を支配し得ることは周知の通りである。）がないのであり，その分だけ立ち遅れているのだという。これはそういったものが具体的な形を為して育ちにくい環境の国であった，とそれだけの事だと思うのだが，はたして伝統思想というものがない我々の日本は当然の如く思想的なものが関係する分野ではまわりの国々に振り回される運命にあったのである。

開国以来，西洋産外来思想がいともたやすく国内に導入されてきて，それらは思想的分野で日本を支配してしまった。これは単に思想だけに限られないのだが，

学問の分野においても日本人は科学の実験の結果と思えるものを何の疑いも持たずに受け入れてしまう。大量の，既に完成したと思える知識を定義を法則を信じこんでしまうのである。もちろん正確を期したものが大部分であるということは維新前のオランダの医学という例もある。しかし，この作者が指摘している問題点とはそれらの輸入学問の結論・定義・法則等に到着するまでの間の，諸々の意義ある仮説・討論又，新説・討論といった段階のくり返しを我々の側では持たなかった，当然あるべき段階を経ていないということである。科学など絶対真実を追究するものならそれで良いのだが哲学などといった，決して真実ではあり得ない，単なる仮説でしかないものでさえ事実として受け入れてしまう，ということである。

思想の影響が最もあらわれる文学についてだが，維新以前の日本文学にあらわれてくる思想は勧善懲悪主義だけだという。そして当然の如く，「もののあわれ」を重んじていた古典の伝統を守ることさえおろそかになり，もともとはっきりした思想的基盤を持たない日本文学が，あらゆる思想を取り入れはしたものの，結局どっちつかずになってしまうのである。さらに「文学主義者」，「科学主義者」といわれた2派がマルクス主義によって与えられたひどく多大な影響は私にとって非常に理解しがたい。信念と感性とによって動くはずの文学家がいかに西洋思想に影響を受けたからといって皆が皆こぞって私小説を書きたがるものだろうか。共通の思想を育てるというこの本のテーマに反するかもしれないが，私は思想というものはある哲学者が発表した思想が世間一般受けしたからといって以前からそれの逆説を唱えていた別の哲学者は，決して相手が正しく自分が間違っているとは思わない，大まけにまけて，自分も正しいが相手も正しいということで和解を求める程度だろうと思っている。もっともこれは私が知識人という人達に対し偏見を持っていて，彼等が西洋思想を知り，マルクス思想を知らずに通ることができなかったと考えるためだろうか。

ところで，戦前から戦時中と天皇を基盤に抱いた日本国は敗戦後基盤を失ってしまい三十年たつのである。日本人には作者の言葉を借りると，行動するに至っても思考を働かせるに至っても基盤が存在しないのである。何を基準に行動をするかというような中心軸の欠けた民族がどのようなものになってしまうか。

法律は規制であって基盤ではない。人々は社会や学校など世の中のしくみに従って生活を続け「常識」と呼ばれるものが言動の中で大きな役割を帯びてくる。日本人が世間体を重んじる人種だというようなことを言われ始めたのもごく近年のことだと思う。

三章の「思想のあり方について」に入りようやく読み易い文章体になってきた。作者が講演形式でまとめており，理解し易かったおかげか，随分と共鳴する箇所が多かったのである。これ自体を投稿したのは 1961 年以前のことだと思うのだが，それがいかに的確に今日の思想界，というより学会，大範囲における専門分野体を言いあらわしているか。何らかのグループが形づくられ疎外的になり内だけで通用する言葉を用いて他のグループを理解しようなどとは努めない。

仮に努めたとしても，互いに考え方も言葉も違えばこれは絶対協調できるはずがなく会合は失敗に終るに違いない。自分達でコミュニケーションを持とうとはせずマス＝コミュニケーションのみを当てにしているような今日の社会，これは十九世紀前半において，個別科学の分類という形で現われ始めていた。この状態は既に出来上がっている現実だけを重んじることにほかならず，互いの交流を持たない諸学問の間ではもはや日本思想の発展どころか思想の消滅につながるのである。作者は，この章のまとめとして各専門家は互いに相手に対して抱いている誤解・偏見をとりやめることとしている。活発な意見交換こそが日本思想を救う唯一の道なのである。

自分自身のまとめとしては，学者連中が話し合いを進めて自分達のカラの中に閉じこめていた情報を交換して日本人独特の思想を発展させる，などどうでもいいようなことではないだろうか。なぜなら芸術でも科学でも互いに個別分野同志でつながりを持たないどころか我々一般人に対しても門を閉じているようにさえ思える。

日本は産業的な部門では戦後他に例を見ない素晴らしい発展をとげた。日本人は属にサルマネが上手だとも言われる。種々の製品を取り入れてはそれらを改良し，さらに優れた物を作り出す，応用がきくのである。技術も高いし，目新しい物に対しても順応性が強いのである。その上，想像力も豊かなのだろう。それでは何がいったい日本人にはかけているのであろうか。西洋の思想家達は決して，自分達の唱えた真理を人々に押しつけようとだけしていたのではないように思えるのである。彼らが皆同様口にすることは人間の意味について，生の意義についてなのであり，人間一人一人が一体どこまで自己を堀り下げることができるか。民衆に思想家達は，もっと考えよ，と促しているのである。人間は，思想家達が存在する意味というものを切実につきつめる。それぐらいのことはする必要があるのではないだろうか。

故きを温（たず）ねて新しきを知る

4年選択国語のテキストを読む

今年度の4年選択国語（前期，週2時間）が終わる時の感想文から。

伊勢物語（岩波文庫）

（鈴木節長 教官）

諸勢力相うって激しく渦まく政治世界に想いを断ち，あくまで人間の愛情に執着した業平とおぼしき貴公子を中心に展開されているこの物語は，それまでの王朝文学にとって思いも及ばなかった愛情の諸相を生々しく描き上げており，そこにはすでに新たな時代の推移を予感させる何かが脈々と流れているとさえ思われる。

4C 尾形亮子

伊勢物語を読んだ第一の感想は，というと「なんて男女間の話が多いんだろう。」でした。

内容だけを見るならば，三文小説のねたにされ兼ねないものがほとんどなのに，読んでいていやらしさを感じませんでした。実に言葉が洗練されていて，簡単明瞭。しかも内容に深みがあったからだと思います。

私が伊勢物語の中で知っていたのは，23段の筒井筒や9段ぐらいでしたが，それでもその時感じた印象は，物語全体に通じるものでした。この物語を選択したのもこの中から匂うように生活の様子が見えてきたり，季節が見えてきたり，そういった事がとても印象深かったからだと思います。なんと昔の人々の生活は，趣があったのだろうと思います。

又，この本を読んでいるうちに平安の昔から現在まで，人の気持が変化していないことに気がつきました。もちろん昔の人々の方が何倍も趣があったようですが……。

私達は，多くの文化を得てきましたが，その反面，大切なものを失ってきたような気がしてなりません。

たとえば，精神分析学や心理学などのためにです。

これらの出現のため，人間の潜在意識には……，とか，こういう場合にはこんな行動を……，など，心の中までもが科学によって解明され恩恵を受けている私も，気持の大部分ではそれを歓迎しているはずなのに，時々それができないのです。

その理由は，「夢」を見たがっているせいかも知れません。

心の隅角にまだ，それが残っているようです。

昔の人々も今の人々も異性を好きになり，やはり昔の人々も今の人々もそのために苦しんだという事実。

それだけで，もうすばらしいと思うのです。

そう感じさせるのは，文学ならではのものと思います。

伊勢物語は文学に入るほどのすばらしい形態を持つと言われていますが，その他，私達に様々な生き様を提供してくれていて，作者がまるで「あなたはどういう生き方を？」，などと言っているような気さえしてくるのです。

その反面，私達が解明できる言葉を使ってくれたらと残念に思うこともあります。

幾通りもの解釈ができるというのは，良い事なのかも知れませんが，作者の言いたかった事を正確に知りたかった気がします。

4C 岡田晃徳

私が先ず気づいた事は，この物語は，源氏物語および在五が物語，更級日記には「在中将」，狭衣物語には「在五中将の日記」という名称で見ているということでありました。そして何故伊勢物語と名付けられたのか，作者はだれであるのかという，多くの不明の点に引きよせられてこの本を手にしました。内容としては，「男」は在原業平と目され，全段を通じて，「初冠」より「臨終」まで，ほぼ業平の一代記の形態をとっているようであります。実際この人物が業平と定めることはできませんが，歌全体を通しての推定として「男」を業平と定める傾向が強いということは，伊勢を読む上で一番大切なことではないかと思います。

では，私が授業中の解釈において感ずることを述べてみたいと思います。まず全篇は男女の語らいの物語

が主軸を占め，「男」の対象となる女性とそのやりとりの内容は，非常に興味をそそられるものがあり，バラエティーに富んでいる。女性には，美しい村娘あり，宮廷に仕える女あり，美しい人妻がおり，高貴なる女性もおり，つまらない女もおり，少女から白髪の老女までが，すばやい恋，ままならぬ恋，純情な恋，浮気な恋と，当時の社会相を写して展開されている点は，妙に不思議であり，現在と相違のない愛の世界の一面を見たような気持ちでした。しかし，このような恋愛談にまじって，友情・主従の情・母子の情といったテーマも組まれているところなど，さすがに，現在においても，人気を集めている点ではないかと思ったりしたほどでした。私が昔読んだ本に「竹取物語」がありますが，この，歌物語としての「伊勢物語」は，「竹取物語」と並んで平安初期の代表的物語であると同時に，この二つの物語が，現存する歌物語と作り物語の最古のものであるというところに，この物語の絶対的な文学的意義があるように感じられました。

次に，特に印象的な歌のいくつかを，自分なりの感想を含めて述べてみたいと思います。私がまず感動したのは第12段の「野焼き」でありますが，男が人の娘を盗み武蔵野へ逃げたが，追われたので女を草むらに隠して逃げた，その後に女の詠んだ「な焼きそ」は非常に感動的であり，男と女の愛の深さを物語っているような気がひしひしと感じられました。その他に印象的な歌としては，第17段の「まれ人と桜」という歌であります。桜の花盛りに何年かぶりで訪ねて来た男を，あるじは，久しく来なかったとせめる内容であるが，この歌も前に述べた歌同様，男女の愛の深さを物語っているが，野焼きとは違った意味で〝愛〟が感じられた歌でした。とにかく意味，表現はちがっていても，愛を語る場面が多いこの物語においで私が感じたことは，何故現在（近代科学・文学）の進んだ時代においても，「伊勢物語」を愛読する人々が絶えないのだろうか，という疑問に対する解答であります。それは前にも述べましたが，愛は言葉や表現に相違はあっても，永久不変なものであるということであります。それ故，現代生活様式とマッチした点が数多いということであります。私がこの物語を読んで一番感想として残ったものは，前述したことが最大でありますが，他に私が予想もできない大きな意味が隠されている可能性は十分にあると思います。

最後に，文章表現に少々触れてみたいと思います。全般的な接続助詞ならびに接続詞の少ないことには驚きましたが，「けり」，「なり」で終わる短文形式の愛歌の段が多いことにも気がつきました。また係結びを多く使って文章を力強いものにしている。すなわち回想的に，簡潔に，しかも優雅な筆致で物語る内容を強調している所などは「伊勢物語」特有のものであるような気がします。しかし読んでいる所々論理的に明確でない部分が見られるのが，この物語最大の欠陥であると思います。

以上が私が授業を受けての伊勢物語に対する感想でありますが，内容は平安時代に書かれたとは思われないような新鮮かつ味わいのあるものであると思いました。

去　来　抄（岩波文庫）

（中村好一　教官）

去来の俳論である。先師評・同門評・修行教に分れ，俳諧の起源，不易流行，わび・さび・風雅・軽み・作家修行・態度を論じた蕉門の代表的俳論であり芭蕉を知る上に必読の文献。

4E　木　村　義　昭

こういう形式の本に接するのは，初めてに等しかったので興味深かった。この本によって去来は，芭蕉の弟子ということを知ったが，このことは驚きだった。しかし，弟子の中には，去来ほどの実力の持主は何人かいたようで，競い合っていたようだ。だから，上達も努力を加えて認められるほどになったと思う。良いライバルを見つけられることほど，自分のためになることはないだろう。

ところで，芭蕉は，俳人として有名すぎるほど知られている。「奥の細道」，「猿みの」など数々の名作がある。私が，これらに接するときいつも感じるのは，風流さ，情景の新鮮さ等で，読んでいるうちに，いつのまにか気持ちまでそうさせてくれるのである。しかし，現代の俳句はというと何か今一つという感がある。現在の生活，社会状況などから，風流さなどとても感じてこないだろうからだ。

この本での芭蕉の役割はというと，弟子たちが俳諧についていろいろ批判したものを統一する意味で意見を出している。やはり，師匠の意見は的を得ていて，納得すべきところが多分にある。このことを文章には，文語形式だったので，授業での解釈からなんとか飲み込めた感じだ。

この去来抄の中で気にいったものに去来の「岩鼻や，ここにもひとり月の客」がある。これは，去来自身が

句を考えながら歩いていくと，自分と同じような風流人がいることに気がついた。というわかりやすい句である。十五夜に月を見ながら句を案じている去来の様子。そして，その前にもう一人自分と同じような者がいる。この情景が目に浮かぶようである。現代のあわただしい世相では，月を見ながら一杯やるとか，すすきや月見草を飾るなどの風習も伝え難いものになっているのは確かである。

現在のわれわれには，昔の物語や，歌集に接する機会というものは，ほとんどないといっても良い。普通，専門書や小説などには通であっても，こういうものには抵抗を感じてしまう。この点，去来抄を選択して良かったと思う。私の心には俳諧についてのまだ新しい一つの知識が増えたような気がする。

4土　新　田　　勝

私は，半年間「去来抄」を勉強しましたが，俳諧について，どこがすぐれ，どこが悪いのかということが，まだわかりませんでした。ただ一つ，俳諧というものは，女心と同じで繊細さを持っているということがわかりました。「去来抄」の中で，私が，もっとも心に残っている作品に「此の木戸や錠のさされて冬の月」という句がありました。柴戸と此木戸で，たいへんちがってくるという点です。城門に寒々とした月の光がさしこんでいるという点について，私もなんとなく，淋しい句だなという思いはしました。

それにしてもこうした点を鋭く衝く芭蕉は，俳諧については，天才といえるほど鋭い感覚を持っている存在だったのでしょう。現代風に言いかえれば，俳諧のスーパーマンだったのでしょう。

他に私が気づいた点としては，「月」を題材にしている句が非常に多いということです。私が思うに，「月」は「太陽」とは対象的に，非常にもの淋しい，寒々しい感があり，句は，なんとなくもの思いにふけったり，なんとなく悲しい時に作るといったところから，共通する点が多いからだと思いました。

去来と其角達の俳諧の考え方，理解のし方の違いは，まだ其角達は，簡単に，文学をあてはめようとするが，去来は，かなりの才能があるようで，考えに考えぬいて句をつくっているということがわかりました。俳諧を学んで，古人の物の考え方などがわかったように思います。

鎮魂戦艦大和（上）

（吉田　満　　講談社文庫）

（池田　豊　教官）

皇国の興廃をかけた沖縄特攻作戦。しかし，神風は吹かず，アメリカ軍の圧倒的な空軍力の前に，大和は三千の兵とともに海中深く沈没した……。死に臨んだ兵たちの胸深く去来したものは何であったのか。不朽の名作「戦艦大和ノ最後」を加筆，訂正をし，決定版にする。

4M　永　井　慎　一

以前まで，戦争を知らない私は，親から聞いたり，または戦争映画などから戦争というものを漠然と知っていたに過ぎなかった。映画などで見るそれは，カッコイイナアという程度の気持ちしか起こらなかった。実際，戦争映画といわれるものの中でも戦争を美化したり，感性だけを求めるものも少なくない。

フィクションでないこの「戦艦大和の最期」を読んで，私はこの世の地獄を感じた。救助艇の船べりにかかる手を，日本刀にて手首よりバッサ，バッサと斬り捨てる様，そして斬られてあえなくのけぞって堕ちてゆくその顔，その眼光の様に，……。また，人間の四肢が一瞬のうちにもぎ取られ吹っ飛んでいく様に，あるいは，著者に肩を触れ合うほどの近さにいた三人の兵士が爆風により即死する様に空虚感を覚えた。

文章が文語体で簡潔であるため，臨場感，緊張感が強くあらわれている。戦闘機の爆音，大和の対空射撃と被爆の轟音が聞こえてくる。しかし，この音のすべてが遠くから聞こえてくるのである。もしかすると，著者自身もそう聞こえたのかもしれない。我々が，百米を全力で走るときに回りのすべての音が聞こえなくなるのとそれが，似ているのではないかと思う。つまり，緊張しているが故に，そして，これがノン・フィクションであると認識しているが故に，「時」というものが静寂をもって流れていったのではないか。

著者が，これほどの体験をしながら，文章が感情に流されずにそれどころかひどく冷静にそれを書いたということは，彼の立場から見た限りの戦争を，そして自分の姿をそのままに描くことによって，敗戦によりほんのわずか以前より賢くなった我々が，彼の戦争への協力の，肯定されるべきところと否定されるべきところをつき止めることができるがためである。そしてこのことは，日本のいや人類の新生のいとぐちとなるのである。

4E 石 井 秀 樹

前期の期末試験でその問題用紙を見た時に思わずあっと思いました。なぜなら，そこには臼淵大尉と太田少尉についてのエピソードが書かれていたからです。

この本に対してそれまでは漠然とした感想しか持っていなかったのですが，この2つの問題を見た時，ああやはりと思ったのです。やはりこの本に対する感想を述べるとするならばこの2箇所しかないと。

そこで今回はこの2つのエピソードの1つについてもっと深く考えてみることにしました。

それは臼淵大尉の場合についてです。

戦争末期，既に海戦の主力は航空機に移り，戦艦の大砲は無用の長物と化した時代に，あえて大和が沖縄へ突入しようとするのは，まさしく特攻以外の何者でもなく，そのような異常な状況下で青年士官たちが自分の死に対する意義付けをしようとしたのは自然なことであったと思います。

学徒出身士官が自分の死を何か普遍的な価値というものに結びつけようとしたのは自然なことだし，兵学校出身者が「国ノタメ，君ノタメニ死ヌ，ソレデイイジャナイカ」と言ったのにしても，そこには君国のためという意義付けがなされていたように思います。

この論争はもはやその是非を判定できるようなものではなく，それぞれの意見は双方にとって，死に直面した自分に対してのぎりぎりの考え方だったのではないでしょうか。

私がこのように彼等に対する感想を書くことさえ，この問題を何か軽々しくしてしまうような気がするくらいです。

毎日を平々凡々と送っている私が，果たしてこのような問題を論じるだけの資格と考え方を有しているのだろうかと疑問にさえ思うのです。

あのころの青年たちは，皆このように自分なりの思想を持って生きていたのでしょうか。

それを考えると思想も何もない今の自分がなさけなくなると同時に，反面彼等に対する羨望のようなものも感じてしまうのです。今の方がずっとめぐまれた社会だというのに。

さて，この論争に対して臼淵大尉は，「進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ，……」という意見を述べ，それに終止符を打つわけですが，やはりそこには双方を納得させるだけの内容があったように思います。

学徒出身士官も兵学校出身者も，もはや動かしがたい自分の死に対しては「日本ノ新生ニサキガケテ散ル」という言葉に意義を見い出し，「負ケテ目ザメルコトガ最上ノ道ダ」「今日覚メズシテイツ救ワレルカ」という言葉の中に，これからの日本に対する幾許かの希望を持ったのではないでしょうか。

自分の死の後にやってくる日本の新生，自分はその新しい日本の姿を見ることはできない。もはや死の決した彼等にはその事に対するいらだちやジレンマはなかったのでしょうか。

実に悲しいことだと思います。「悲しい」という言葉しか思い浮かばないほど悲しいことだと思います。

戦争に対しての「怒り」といった大それたものではなく，何の意味も持たない馬鹿げた作戦のために死なねばならず，その死に対して必死に意義付けをしようとする彼等のことを思うと，どうしてもやりきれない気持ちになってしまうのです。

我々青年は，36年前に日本の新生のために死んで行った自分と同年代の若者たちのことをもっとよく考えてみる必要があるのではないでしょうか。

世界の文学への小さな窓

―1年生の課題読書（続）―

緋 文 字（ホーソン）

1土 吉 沢 信 之

アメリカの作家ホーソンの緋文字をよみました。

罪を犯した女，ヘスタ・プリンが罪のために生まれた幼い子供と共に胸に赤い文字Aをつけて処刑台に立ってさらし者になるところから始まる。どうして彼女は処刑台にたっているのだろうと疑問をもっていたらあれよという間に読み切ってしまった。そういう点で作者の描写はうまいと思う。また，描写が読者をのめりこませるように上手に表現していると思う。

暗く赤い色調と共に，緋文字の悲劇性を完璧にして，

人間の悲しみを長く伝えているこの物語の結末は，作者の人間観を表現しているものだろう。作者は，小説が始まる前に犯したヘスタと牧師の罪を軽く取り扱い，それよりも作者は極悪の罪として，友人をいつわって相手の苦脳をさらけ出させ，復讐の焔をもやしてあくない心理的苦痛を与え，冷血にも他人の心の尊厳を踏みにじった医者の罪とした。でも作者は罪の重さは別として，一度犯した罪は永久に魂の汚れとして消えることはないと考えているようだ。そのことは，7年間もの間，罪の重さにたえ，十分なほどの罪の償いをしたはずのヘスタが一度土地を離れても，もう一度もとの土地に帰ってきたことに表れていると思う。また，罪が消し難い汚名となって残るということは，最後に墓碑銘となって，物語を貫く暗い色調をだしているものと感じられる。

この作品で，ヘスタの娘であるパールが緋文字の象徴であるほか，獄舎のドアと野バラに見る死と生・闇と光・醜と美の自然の象徴などは興味深い。ばらと雑草の色彩の表わすもの，輪と鎖，光と影，胸と頭のイメージなどには，作者の鋭い感覚と作品の綿密な構成が感じられる。鏡に関することだけでも注意すれば6つくらいある。1つはヘスタが自分から進んで医者に会い，呪いを解くように歎願する浜辺の水溜りは，過去と未来との接触を象徴するもので，水に落ちる自分の影像と無心に戯れるパールの姿に暗示されているようだ。鏡とは作者にとって現実と想像との接触点であり，また過去と未来との中立地帯であると考えられるから，過去の事実と考えられるパールが無心に戯れるに止っていて，想像力のはたらく大人の二人を水に映さないのは二人の会合の失敗を暗示するかのように思える。2つめにヘスタが牧師と出合う原始林の小川のほとりは，やはり筋の展開に重要な転機を与える場所だが，現実にパールの野性と神秘性を映して流れる小川は，同時に過去の秘密を明さぬものであるように思え，洗練された女性としてのパールの未来を予示しているように考えられる。又，パールが赤いAの文字のない母の胸を指して対岸に佇立するのは虚偽の未来を拒否する姿と解釈される。3つめに，牧師にとって姿見は幻影の住み家であり，そこには悪鬼とともにヘスタやパールもいる。4つめにパールの眼にみえる過去の罪の姿は現実の自分の姿とは違うが未だ現実に償い救われていない姿としてはヘスタに認められる。5つめに知事邸の甲冑が凸面鏡となり，ヘスタの姿はかくれて胸の赤い文字Aだけが立ち歩く罪の化身として，又パールは小妖精として映し出される。6つめに医者は，想像の鏡の中に悪の権化としての自分を見る。

これらのような強い表現に対して，呪いを解放されたパールの幸福な未来については後日の噂としてで弱い。又，自分の罪を牧師が告白する場面において，太陽の光については，一言ふれているだけであって，更にその告白さえも人々には牧師の意図通りには伝わっていない。それに，物語の終わり近く，悲しげに胸の緋文字を指し，死んでからも遺骨を交えることのできないヘスタを説明してはくれない。

しかし，何はともあれ緋文字という作品は，美しく含蓄ある文体，テーマと緊密に結びつく構成，巧みな象徴法による表現ですばらしい作品だと思う。

白　鯨（メルヴィル）

1E　斎藤　茂

アハブ船長にひきいられた捕鯨船『ピーコット号』は，クリスマスの夜，港をあとにした。船長は，白鯨に片足を喰いちぎられ復讐の鬼と化して・・・。

この物語は，フィクションである。しかし，ぼくは数ある冒険小説の中でも，これほど迫ってくるもの，感動の場面を得たものはなかった。この荒くれた男たちの繰り広げる捕鯨の場面の生々しさ。鯨の描写の細かさと描写のうまさ。ぼくは居ながらにして，その様子が手に取るようにわかった。捕鯨の場面の生々しさ，心に強く迫ってくるものは著者であるメルヴィルが，捕鯨船に実際乗ったためではないかと，ぼくは想像する。また，描写のうまさ，特に比喩の巧みな使い方は著者の非凡な才能が伺われる。

この『白鯨』（モビー・ディック）を読むのに，ぼくは相当な時間を費した。だが，読み終えた時は感動と，安らかな得意と満足とが残った。また，この物語を読むと気付くと思うが，この物語には，ただ物語的な要素からだけ成り立っているのではない。ぼくの気付いた範囲で言えば，生物学的要素も哲学的要素も入っていたように思われる。それにその要素が非常に良いバランスで混合されていて，読む者は深く考えさせられる。

要素別に感想を述べてみたいと思う。まず生物学的要素。鯨の分類があったが今でこそ図鑑やテレビなどで，鯨の姿を見る機会が多くなり，鯨に対する認識が深まっているが，昔，つまりメルヴィルが生きていた19世紀の中ごろから終りまでに，相当数の鯨の種類が分類され特徴が解ってたようだ。ぼくが思うに，今知

られている鯨の体系的な分類は，この時代に述べられていることと同じなので，鯨の体系的分類は，この時代に行なわれたのだろうと推測している。

次に哲学的要素。これは，ぼくにとって難解の物だった。アハブ船長，その他高級船員によって口論する場面，ひとり言を言う場面，これらの中に著者の人生観というものが，非常に難しく，程度が高い言葉で文語的に表現されているので，ぼくにはしっかり意図が理解できなかった。

次に物語的要素。この『白鯨』という物語は楽しむことの出来る小説ではない。だからといって，くだらないかと言うとそうでもない。前にも述べたが，この物語は心に強く迫ってくるものが感じられる。それが最も強かったのは，やはり最後の追跡の章だ。アハブ船長と白鯨の格闘はスリルとテンポがあり，次はどう戦いが進展するか，非常に興味深かった。アハブ船長は片足を白鯨に持っていかれた。ただこれだけで，あれだけの執念と怨に燃えようとは。そうまで考え込む理由がどんな事か，探し考えた。そこでぼくの出した結論はこうだ。この老人には捕鯨においては地位も名声も，それに富もある。しかし白鯨の出現によって彼のプライドが傷つけられた。それと同時に彼の心の中に眠っていた野性が一気に目覚めたのだろう。それに彼はこの航海で燃え尽きた。彼は白鯨を仕止めることによって自分の人生に終止符を打ちたかったのだろう。

彼の激しい人生は前向きだった。この前向きの精神を忘れたら進歩はありえない。この精神は不可能を可能にするだろう。

バックルベリィ・フインの冒険（マークトウェイン）

1土　伊　藤　彰　洋

この物語の主人公のバックルベリィ・フィンの生き方に強い感銘を受けた。

そして彼の自由奔放な生き方を羨しくも思った。

その１つは，彼が黒人奴隷ジムと旅を共にすることであり，また，それは当時のアメリカでは，白人と黒人との人種差別という風習を気にもせず，常に，人と接し，助け合いながら生きていく，その彼の優しさに強い感銘を受けた。

また，文明を否定するような自然児ハックルベリィの冒険にとっても興味を持った。

例えば，黒人のジムをかばいながら河を下っていくのに，筏に乗り込んで来たペテン師どもに騙されているふりをしながら，彼らを最高度に利用して，また，ときどきの目的を達成しようとする考えには，ずるいと言いたくなるようなこともあった。

また，ハック・フィンは，自分を死んだものと見せかけるため，野豚を殺し咽喉の所に斧をぶち込んで，それから豚を地面の上に転がして血を流させて，本当に自分が，切り殺されたように斧に髪の毛をくっつけた。最後に，自分が殺されて川に捨てられたように，袋に石を詰め込んで，それを川まで曳き擦って行って抛り込み，誰も疑わないようにした。この所は，頭がいいというか，かしこいというか，とにかく，尊敬に値するような気持ちになった。

もし，今の日本の川で，ハックルベリィ・フィンの冒険と同じように，筏で川を下ったら，どうなるであろう，急流におし流されて筏が壊れてじまうだろう。筏が壊れなくてもすぐに海に出てしまって危いだろう，日本ではとうてい出来ない冒険だ。

でも，ぼくは，それがしたい。ハックルベリィのように，自由で，気の向くまま，遊んだり，したいことをしたいときにして一生を過ごせたら，いいと思う。

初め，この本を読む時は，読む本がないからと，この本を選んだが，読んでみると，主人公のハックルベリィ・フィンや黒人奴隷ジムの行動，考え方などが，とても面白く，また，ハックの，常に，人と助け合いながら，生きていく姿が，頭の中に映し出され，自分が，ミシシッピーのような，広大な流れの上で過ごしているように思えるようになった。

他の人にも読んでもらいたい。

女の一生（モーパッサン）

1C　平　松　和　子

私は，以前（中学１年のとき）この本を読んだことがある。なぜこの本をあの時読んだのかは，思い出せないが読み終えたときなんとも後味の悪い思いをしたのは事実である。その時私は，激しい怒りを感じぜずにはいられなかった。それまでの私の読書というものは，必ずしも人のいう幸福になれなくとも，主人公は，他人と違った自分の幸福を味わっていることが多かった。つまりハッピーエンドの作品が大部分を占めていたといってよいだろう。このような読書しか経験

していない私にとって，「女の一生」はどう受けとめてよいかわからない作品であった。そして心の中にその思いが残っていたため，16になった今，もう一度読み返したのである。

今の私が読み終えたときの感想は，3年前とはたしかに違っていた。前は，ジャンヌを哀れみジュリヤンを憎むという単純なものだったが，今は反対にジュリヤンにどうしようもない哀れみを感じ，男爵と男爵婦人の悲しみと罪，ロザリの強い心，二人の司祭の考え方の違いなど複雑な人間関係を感じた。複雑な人間関係を海とするなら，ジャンヌは小船であるかのように思われる。

そして，ジャンヌを幸せ少ない人にしたのは，彼女の両親かもしれない。彼女の不幸は，サクレ・クール修道院寄宿舎などという世の中と隔離されたところから始まる。そこで12から17までの5年間もの長い大切な時を過ごすことにより，男爵は娘を，幸福な善良な，優しい女に育てようとしたのである。しかし，美しいものには，目，心を開き，醜いものには，背をむけるような，片目だけを開けて歩くような不安定な教育が彼女を，人の心を見ぬけないような，おろかな女性にしてしまったのである。

彼女の人生（大海にさまよう小船）をより苦しく悲しいものにしたのは，ジュリヤンである。彼は，二重人格者のように弱い人間であり，それ故に利己的でわがままである。いやなってしまったのかもしれない。少なくともジャンヌと出会ったころの彼は，優しい青年であったようだ。そしてジャンヌと暮らしていくうちに，財産管理に夢中になり，ケチが表面化してきたのかもしれない。そうだとしたらしょうがないが，もし初めから彼女をだましていたとすれば，一番憎むべき人物であることは，いうまでもない。

ところが，普通憎むに値する人物というものは，だれにも愛されないものであるが，ジュリヤンは伯爵夫人と愛し合っている。そしてジャンヌはそれを知りつつ，どうすることもできなかった。しかし伯爵は，二人に死というつぐないをさせた。私は，なにもジャンヌに罪を犯させたいわけではないが，このとき彼女に夫をとがめることができたら，一生泣かなくともよかっただろうと思う。

男爵夫人も男爵に浮気されたが，彼女は自分でもやり返えしている。そして年老いてからはしっかり男爵の心をつかんでいるといってよいだろう。しかし娘のジャンヌに，父と母は強さを教えず，耐えることだけを教えた。だから彼女は，一生ジュリヤンの心をつかめなかったのではないだろうか。この原因は司祭にもある。最初の司祭は，神の使いともいえる立場なのに，だらしのない若者をせめはせず，なおもかばう。これは本当のやさしさからだろうか，たしかに司祭は，村人の人気を集め，自分でもそれが正しいと信じていた。しかし，後の司祭は，若者たちや前の司祭を批判し，優しさを与えず，それどころか，子を産んだばかりの犬の腹をやぶり殺したり，神を信じるものとしてゆるされないことをしたりする。

この二人がジャンヌに神の教えとして，正反対のことをいう。一人は夫をゆるせといい，もう一人は夫の罪を追求せよという。これがジャンヌを振り回し踏みきれない人とした原因だといってもよいだろう。

こんな彼女と正反対なのが，ロザリである。ジュリアンに愛されたのは一時期，あとは子供ができたとわかると，優しい人と信じていた心は切り裂かれ，追い出すなどと言われる。だが彼女は，その屈辱に負けず自分の幸せをつかみ，自分が哀れまれる立場なのに昔の主人の世話をみに帰ってくる。つまり彼女は，自分から人に働きかけ，幸せをつかんだのだと思う。つまり彼女は積極的に生き，ジャンヌは消極的に生きたのである。

これを立証するのは二人の子どもである。二人ともジュリヤンの子供でありながら，ロザリの子は真面目な母想いの子に育った。しかしジャンヌの子ポールは，母を裏切り，金のことばかりをいう。ポールをそんな子にしたのは，子を大切に甘やかして育てた母にあるのかもしれない。

この世に，これだけの不幸を背おっている女性がいるとは信じられない気がするが，この不幸の一つぐらいは，だれでも持っているように思われる。それは，世に完全な女性のいないことを物語っている。なぜならジャンヌは自ら自分の弱さ故に，不幸の種をまいているからである。

私は，決してジャンヌのようにならないとはいいきれないが，自分で不幸の種をまくような弱い人間(女)にはなりたくないと思っている。

大尉の娘（プーシキン）

1土　小　針　光　則

まず初めになぜ僕がこの作品を選んだかを簡単に説明しよう。岩波文庫解説目録を受け取った僕は，とにかく印をつけた作品の解説部分を全部読んでみて，そ

の中から幾つかの読んでみたいと思った作品を挙げた。そしてその中に，「大尉の娘」と言う作品がふと目にとまった。理由を言えばやはり印象が深かったのだと思う。そしてその時，既に僕はその作品には，おそらくこのような事が書いてあるのだろうと予想していた。

さて読み終わってみると僕が予想していたのとは，まるで違っていた。まず題名からして主人公は女の子だと思っていたのが貴族の男の子だったり，まあその他ほとんどが違っていたが，戦の話というのは当たっていた。内容は，ピョートル・アンドレーイチと言う貴族の息子が軍隊に入りベロゴールスク要塞という所に行って，その要塞の最高責任者ミローノフ大尉の二つ下の少尉として当時（1773年）起きた乱をきっかけに波乱に飛んだ一時期を過ごすと言った所だ。しかし，これを聞いてなんだと思ってはいけない。実際この小説の魅力と言うべきものは，この作品に登場してくる人物を巧みに使う所にあると思う。例えば，この主人公アンドレーイチと言う人が，その要塞に行く途中で親切にしてやった男が，後に反乱を起こしてその要塞に襲って来たりなどと言うふうに，とてもうまく組み合わせが出来ている。

ところで，この作品を読み終わってみて一言でなかなか面白いと思った。具体的に言えば，その登場人物の組み合わせがなみの冒険小説よりもうまく出来ているということと，内容も一種の冒険小説と言ってもおかしくないと思うし，その反面，戦争が持つ悲惨さ又その中での恋など，とにかく本当によくこれだけ気をかけて書いたと感心すると同時に，これだけ考えて構成されていれば自然にこの作品に対してうなずける。

ここで一つ気がついたのだが，この作品はいったい何を言いたかったのだろうか。ふと考えたわりにはなかなか大切なことだと思うので深く考えてみたい。そのためにはさきほどのあらすじをもう少し一部分を詳しく説明しなくてはならない。要塞に襲来したのは，プガチョーフといい，要塞の攻撃を破ってアンドレーイチ少尉や大尉一家のいる要塞を落とした。その後将校を私刑にかけて大尉をはじめ将校は全員死刑になったと思ったら，このプガチョーフとアンドレーイチは旅の途中で会い，借りがあったプガチョーフは，アンドレーイチ少尉だけは助けるのであった。そしてプガチョーフはその後も暴れアンドレーイチに何度か会うが必ず助けてやり，それがプガチョーフが征伐された後に少尉を軍法会議にかけ日本で言う無期懲役をくらうことになる。少尉は無実なことを言うのはいとも簡単なことだったが，それには自分の一番大切な恋人マリヤを巻き込むことになると思って真相を言わなかった。それを悟った，ベロゴールスク要塞攻防の末戦死した大尉の娘であり少尉を愛しているマリヤは，自ら当時の陛下に真相を打ち明けに行くのだった。この優しさと勇気，決断力，すべて愛する少尉のためのものなのだ。こう思うと何とも言いがたい気持ちになる。映画の解説者ではないけど，本当は人間は愛するべきなのに多数の人を殺す戦争をなぜやってしまうのだろう。話は最後に少尉の疑いが晴れて大尉の娘と結婚した所で終わっている。

後記を読むとこの話が物語だけでなく実際にあった話だとわかった時は信じられず驚いたことしか覚えていない。

これだけ書くのはドイツ人かと思っていたが，ロシアの作家プーシキンに一言

「サスガ，スバラシイ。」

と，ロシア語で言ってやりたい。

赤　と　黒（スタンダール）

1E　丹　治　修　一

「赤と黒」こんな不思議な題名に魅せられてこの本を読むことにした。題で選んだのだから，題についても幾分考えてみる必要があると思って調べてみた。

「赤と黒」の赤は，ナポレオン時代の栄光。すなわち大革命および帝政時代で，行動の時代を意味し，黒は聖職者の黒衣。すなわち王政復古時代で，何の魅力もない陰気な時代を意味する。とあり，ぼくの想像の範囲を全く越えていた。この題一つで時代そのものを象徴していたのである。

この小説は，ジュリヤン・ソレルという貧家の少年が，その才智と美貌とで上流階級に進出していく野望と，はげしい恋愛の生涯を描いたものである。ジュリヤンは高潔であり，誇り高く，自尊心のとても強い青年だった。彼は出世のため，そして自分の強い自尊心から，レーナル夫人を恋におとしいれてしまう。しかしそののち，彼自身もレーナル夫人の純真な心に夢中になってしまう。しかしそれがレーナル氏に知れ，ジュリヤンはやがてパリのラ・モール家へ行くことになる。そして，田舎でいつも思い描いていたパリの夢に目をくらまされ，気位の高いラ・モール嬢に恋をする。やがて二人は結婚し，おかげで大貴族になることができる。しかし，レーナル夫人の密告の手紙でその地位がくずれると，彼女にピストルをむけて重傷をおわせ

る。ジュリヤンは獄中でやさしいレーナル夫人の真価を知り，心から愛し合った。しかし彼は死刑になり，彼女もその後をおう。

スタンダールの描こうとしたジュリヤンの根本的な姿は，いったい何か，ぼくはこう思う。パリの上層階級は，しっかりとした物を感じる力がなくなっている。しかしジュリヤンのように，教育を受けながら，貧しいために働かなければならない青年たち，つまり市民階級の人達は，意志の力を失ってはいない。なぜなら，その人達は，働いているから，上流階級からのつまらぬ義理にしばられないし，人生をひからびたものにする，上流階級特有の見方や感じ方にもそまらないですむからである。こういう情熱をもった人たちは，ジュリヤンのように偉大になるだろう。また，ジュリヤンは単なる野心家ではない。常に自己に対する誠実を失わなかった。スタンダールはこれだけの点をジュリアンに求めたのである。

もしぼくが今，ジュリヤンと同じ立場に立たされたとする。そしたらぼくは彼のように野心に燃え，死をも省みず自己のエネルギーを大胆に発揮できるであろうか……。しかし，このようなジュリヤンの姿は，ぼくの胸にいつまでもたくましい勇気と情熱を与えてくれるだろう。

フランクリン自伝
（フランクリン）

1土　酒　井　博　之

「ふう。」ぼくは，この本を読みおえて，思わずため息をついてしまいました。それは，ぼくにとって彼の生活があまりにも掛け離れていたからです。そして，読み始めて，最初に心に残った言葉が浮かんできました。

「もしもお前の好きなようにしてよいと言われたならば，私はいままでの生涯を初めからそのまま繰返すことに少しも異存はない。」

この言葉どうり実行できる生涯をおくることは難しいし，もうすでに何度も後悔しています。

ぼくが，この本を読もうと思った理由は，ぼくの知っていたフランクソンが，アメリカの資本主義社会に大きくかかわっていたからです。ぼくの知っていたフランクリンとは，稲妻と電気の同一性を発見し凧を上げて実験したフランクリンのことです。このフランクリンとアメリカの資本主義社会とがどのような関係にあったのかに，興味を持ったからです。

この本には，現在のぼくたちに欠けている所や，まったくない所などがたくさん書かれています。その中で特に感心したのは，十三徳というものです。これは，フランクリンがいかなる時にも過ちを犯さず生活できるようになりたいと思って作ったもので，当時の彼にとって必要であり，また望ましく思われたすべての徳を13の名称に含めてしまい，そのおのおのに短い戒律を付けたものです。彼は，この十三徳のすべてをものにすることはできなかったのですが，それでも彼の生活のすべてに役立ちました。ぼくも，自分にあった徳を作りそれを基準にして生活できたらと思いました。また，彼はとてもたくさんの本を読み，そのため多くの知識がありました。彼はこの知識を生活の中に取り入れ，職業である印刷業にも生かして多くの利益と信用を得ました。また，それだけでなく，州知事などの，偉い人たちからも，意見を求められたりするようになりました。ぼくは，哲学や科学に関する本をあまり読んだことがありませんでしたが，この本を読み，その重要性がわかったような気がします。さいわいこの自伝には，彼の読んだ本が多数のっているので，これを参考にして読みたいと思います。

この本は，彼が子孫のために書き残したものです。彼の子孫が，彼のような境遇に合った場合，どのようにすればよいかをおしえたものです。ですから，ぼくはこの本を人生の教科書として，何度も読み返していきたいと思います。

ロビンソン　クルーソー
（デフォー）

1土　遠　藤　文　義

僕がこの小説を読んだ動機というのは，普通の人だと，この物語は小さいころ絵本なんかで読んだことがあるためか，何か少し程度の低い本と思われ，価値が低くみられるみたいだ。しかし僕は，絵本と文庫本とでは違うし，それに内容を詳しく知らなかった。解説目録を読んでみても，孤島での生き方などに興味がでてきたからだ。

しかし，この小説を読むのにちょっと時間がかかりすぎた。上・下二冊あわせて約800ページぐらいだったが，クラブの合宿中の暇なとき読んで，家に着いたらすぐ感想文を書く予定だった。しかし，合宿の期間

5日間の2倍の10日間もかかってしまったので，ちょっと覚えていない部分があったりして，内容をよく理解できない部分もあった。それは大体キリスト教のことについていろいろでてきて，特に第二部ではそうだ。僕はイエス・キリストには興味があるが，宗教関係は，あまり好まないほうなので，少し何をいっているのかわからなかった。

あらすじとしては，主人公のロビンソン・クルーソー，本名は，ロビンソン・クロイツナーエルという人は，ひどい放浪癖にとりつかれていて，航海にでて，遭難して，絶海の孤島に漂着し，難破船からいろいろなものを運びあげて，毎日毎日の生活のために苦闘し，一人の蛮人を助けて，これを従僕として，やがて故国に帰っていく，ということだ。これは第一部だけであるが，第二部は，少し立場が違う航海，つまり，一部では，ロビンソンは無人島で助けにくるのを待っていたが，今度は，その島に住ませておいた人々のために，いろいろ役立つものを持っていってやる航海なので，はじめは，わけて感想を書きたいと思う。

このロビンソン・クルーソーは，母の実家が土地の名望家で，それに三男だったので，これといって仕事がなかった。それで，ずいぶんと早くから放浪癖にとりつかれていて，どうしても船乗りにならなければ気がすまない性分だった。そのため，父がいくら家に残るようにと忠告してもだめだった。

「家に残れば立派に世間にも出られるし，勤勉と努力しだいでは財産をきずくのも思いのままだし，だいいち安らかで楽しい生活もおくられるではないか。」これを聞かせられたら，僕だったら家に残るだろう。大体兄が二人いるといっても，二人とも家にいないのだから，親のめんどうも見なければならないと思う。それからもう1つ忠告の内容は，自分の経験からいって，中くらいの身分が人間の幸福にも一番ぴったりあってもいる。よくみてみるがいい。人生の不幸をしょっているのは社会の上層と下層の者にかぎられている。これを読んでなるほどと思った。でも，中くらいの身分といってもいろいろあると思うが，下層の上の部くらいだと思う。

ロビンソンにもどるが，この人間は自分が危険にあったときだけ，家に残ればよかったなどと思って，少したつとすぐ忘れてしまう。この性格にはどうしようもないと思い，あきらめたい気持ちだ。それから，西洋人なんかは，神に祈ると思ったが，ロビンソンは，全然関係ないので，これにも驚いた。でも，やっぱり何回も死の直前まできても助かると，人間が変わるのだなあと思った。このロビンソンが，前とは全く別になってしまうのにも驚いた。どういうことかと言うと，今まで宗教など関係なかったが，やはりまわりに人間がいない絶海の孤島にいると，頼るものが神しかなくなり，難破船から持ってきた聖書を毎日読み，後には，言葉が全く通じない蛮人にまでキリスト教を教えられるほどになったのだ。何故こんなになったのかは，やっぱり，あまりにも聖書に書いてあることが自分のことに合っていて，とても心に強く感じたからだと思う。それに，船が遭難したのに，自分一人だけ島に上陸することができたり，その船が，自分が何も持ってなくて困っていた時に，島の近くの岩のあたりにつないであったりして，そこから荷物を運ぶことができたりしたので，これは神の摂理によるものとしか思えないと思う。だけどもし，この船がなかったらどうなっただろうか。何も持たないで，全くわからない島に住めと言われたらどうすればいいのだろう。考えるだけ恐ろしい。これも運がよいことに，人間に害を加える野獣も，人食い人種のような蛮人もいなかった。しかし実際は，クルーソーが上陸したところの反対側のほうに，2，3年に1回くらいたびたび上陸していたのだが，それに熱帯地方だったということも運がよかったことの1つだと思う。何故かといえば，着るものに困らなくてすむからだ。それからまた，家禽用の穀物がはいっていた袋を，袋だけ使おうとして中にはいっていたわずかな穀物を捨てた。それが大麦で勝手に育っていたということだ。

それから，島でも生活のしかたに興味をもった。まず食べ物は，難破船からとったものを除いて，前の大麦，島に育っていたぶどうやそれを干したもの，亀の肉や卵，山羊や鳥の肉などだ。

そして，家は，テントと，空洞で，その前にとても高い柵をつくり，そこには入口を設けないで，梯子を利用して柵の上をこして出入りするものだった。そしてその柵子は，柵越しに引きあげてしまい，外界から防衛できるという方法だ。なるほど頭がいいなと思った。なんといっても島のことが全然わからないのだから，できるだけ用心深くしていないといけないのだなと思った。

ロビンソン・クルーソーは，この島に流される前に，ブラジルで農園をつくっていて，それが，ロビンソンが島にいるあいだも行なわれていて，成功して，クルーソーにとてもたくさんお金がはいった。それで，ロビンソンというのは，最後までついているな，と思った。

最後に，この本を読んでみて，こういったロビンソン・クルーソーの行動は，少年にも大人にも，なにか

しら人間の原型的な行動として永遠に魅力をもちつづけるように思う。人生が大海原にたとえられ，我々の生のいとなみがその上の漂流にたとえられるのは東洋でも西洋でもかわりがないという。ロビンソンがただ独り，営々として生活を切りひらき，ものを作り，喜び，悲しみ，祈り，呪って日々を送ってゆく姿の中に，少年は少年なりに，大人は大人なりに，自分の生活の姿の反映を見出すことができると思う。この「ロビンソン・クルーソー」がいつまでも我々に愛読されるのは，その主人公が単にイギリス18世紀の人間像の象徴であるばかりでなく，現代の我々自身の人間性のもっとも中核的なものにもかたく結びついているからであると思う。

レ・ミゼラブル（ユゴー）

1M　山　内　美知男

僕がこの本を読んだ理由は，夏休みの課題ということもあるのだが，本当は，前からこの本が読みたかったからだ。なぜかというと僕がまだ小学生のころ，誕生日に兄からプレゼントされたからだ。その本はもちろん児童向けの大きな字の本だったのだけれど，内容がとてもおもしろかったのか，一晩で読み切ってしまい，翌日は一日中，そのことで，ああだこうだと考えにひたっていた。その時の本の題名は「ああ無情」だったように思う。そして今，僕が手にしているのは「レ・ミゼラブル」。読み終えた時の感動というか，爽快さというか，とにかく長い。読み終えることだけでも大変だった。しかし，すばらしかった。人生について考えさせられたし，複雑なパリという都市の社会性，あらゆるもの，あらゆることが，僕の頭の中をかけめぐっていった気がする。

ジャンバルジャンはある日，貧困と姉と子供という重荷を背負い，ちょっとした出来心でパンを盗もうとする。そしてそのちょっとした出来心は大きく重い罪となって彼にのしかかってくる。しかし彼の心を救ってくれるものがあった。それは神の愛であった。神の愛に救われたジャンバルジャンはマドレーヌと名を変えて，市長の座についていた。しかしそれもジャベルの出現によって，追われる身分となったのである。

ここで僕が先ずいいたいのはなぜジャンバルジャンは苦しまなければいけなかったのか。貧富の差別をはっきりつけている社会，きびしすぎる罰，誤った道徳心などがあげられると思う。そしてまたナポレオンの時代ということで，人々は驕り，怠けてそして堕落する。そういう時代のこういう人々がいたからだと思う。そしてまたジャンバルジャン自身も弱い心を持っていたために自分に負けてしまったということだろう。

それならばなぜ神の愛は彼を救いえたか。それは，唯物論にすぎない世間の人々の考え，つまり，金や欲にふりまわされる生活から自分自身を救い出したからだと思う。

そのほかにもたくさんの可哀そうな人々が出てくる。コゼット，ファンティーヌ，ある意味ではナポレオン，テナルディエなどの人々が。

何回も読み返すことはできなかったが何度も読めばもっと違った面がわかってくるだろうと思う。社会というものは人を喰いものにするものではなく，人間がよりよい社会を築きあげていくものだと思った。

ジャン・クリストフ（ロマンロラン）

1M　栗　城　一　栄

私は，ロマン・ローラン作のジャン・クリストフを読んだ。思ったより文章表現が難しく，ほんのすこししか読めなかったのだが，若き日のクリストフを知った。

クリストフの祖父のジャン・ミッシェル老人は，音楽家としての名声は高く，息子のメルキオルに跡を継がせようと期待していた。

これは，一種の親馬鹿というもので，自分の才能を息子も持ち合わせていると過信したものである。はじめはメルキオルも期待に答えてくれたのだが，彼には思想というものが欠けていた。私も自分がもう少し考え深ければと思うときがしばしばある。しかしこれはどうなるものでもない。このことをこの本の中では，「彼の神は恩知らずだった」といっている。

彼は，のちに身をくずし，落胆しきって酒場の仲間らと競争者の悪口を言いながら，せめてもの意趣晴らしをしていた。

クリストフの母はといえば，メルキオルの結婚した当時は女中だった。メルキオルがなぜ彼女と結婚しようと思ったのかは，どうしても私にはわからない。彼は地位も多少あり，かなりの好男子で，金持ちのお嬢さんに目をつけることもできたろうに。そして，ジャン・ミッシェル老人もそれを望んでいたのではないだ

ろうか。

でも，やはり彼は結婚するとすぐ自分のしたことに落胆したような様子をした。そしてまた，あわれなルイザにもさらに隠さなかった。私はこの身勝手な男に非常に腹立つ思いだった。すごく地名が高く，すごく美しい顔をもった男でさえこれほど身勝手ではなかったろうに。

しかし，ルイザはいかにもつつましやかに彼に許しを求めた。ここでなぜ，彼女が許しを乞わなければならないのか，どうしても私にはわからなかった。

ところで，彼らの生活はというと，父親がこのような始末なので当然困難を強いられた。

ある日，クリストフはいちばん奇麗な服を着て，ルイザの働いている家へ来るように言われた。そこには２人の子供がいて，突然そのうちの１人がクリストフの服をつかみ，「この服は僕んだ」といった。事実，その服はルイザがその子達の母親からもらって，仕立て直したものだった。クリストフは恥かしさでいっぱいになった。私だったら有無をいわせずその子らをなぐり倒し，出ていったろう。

しかし，クリストフは辛抱していた。だが２人の子供は，子供にありがちな無理由の残酷な反感をいだいて，彼をいじめてやる方法はないかと考え，それを実行に移した。これにはクリストフも怒り，１人の頬をなぐりつけ，もう１人を一撃で打ち倒した。私はこのとき胸がスカッとした。いっそのこと殺してしまえとさえ思った。それほど彼らのしたことはひどかった。２人は母親にいいつけ，ルイザもかけつけてきた。そこで私は大人のみにくさを見た。ルイザはクリストフを殴りつけ，謝らせようとした。クリストフは断固として言う事をきかなかった。そして逃げだした。私はクリストフの気持ちを胸にしみて感じた。それほどロマン・ローラン氏の情景描写はすばらしかった。

このような家族にかこまれた中にも，彼は祖父のジャン・ミッシェル氏だけは尊敬していた。祖父はクリストフにピアノを与えた。

クリストフに与えた訳ではなかったが，後にクリストフだけの物となった。クリストフはこのピアノのおかげで，彼の青年期を青年音楽家として生活することができたのである。

彼は音楽の才能を若いうちに発揮したため彼の友人は，管弦楽の仲間にしぼられた。したがって，同年令の友人を持たなかったのである。いや持てなかったのである。私は，そのような才能にはおせじにも恵まれるとは言いがたいが，そのために友達は同年令の者ばかりである。彼はどれほど同年令の友達を求めていたことだろう。

ある日彼は楽長から，小さな別荘で催される午餐へ招待を受けた。クリストフはライン河の船に乗った。そこで彼は生まれて初めて年令の近い友達オットーをつくったのである。

つくったというよりこれは必然的な出合いだったようだ。オットーは以前からクリストフを知っていた。また尊敬していた。私にはクリストフの気持はあまり分からないが，この時だけは本当に幸せだと思ったのではないか。

しかしこれも一時だけの幸せに過ぎなかったのである。性格の不一致がもとで，互いの気持ちがまずくなったのである。せっかく出来た友達なのにどうしてこうならなければならないのだろう。私はクリストフがみじめに思えてきた。次に出会ったミンナのときもそうである。結婚を約束し合ったのに，身分の違いということで，別れなければならなかったのである。思えば，クリストフはこのような不幸と苦しみの中で生きて来たのである。

幼年期に彼は一家の主となって以来，苦しみと悩みの中で生きてきたのである。この苦労が明日への活力となってクリストフは生きてきたのではないだろうか。私は精神的に幼かった自分を省みて，もう少し人間的に大きなものになりたい。

父　と　子（ツルゲネフ）

1土　佐　藤　正　一

この小説の主人公，バザーロフ・ゲーニイヴァシーリッチは何か自分に似ているような気がする。その小説が書かれた当時は，丁度産業革命がロシアにも波及してきたころである。その時代，新旧交代で世間がもめているころ古い考え方を認めようとしないで，そんなバザーロフのひたむきに生きている姿には共感させられた。けれども，その時代の読者には，非難のまとであったにちがいない。

バザーロフのいう自尊心をぬきに考えてみると，小説の中に出てくる老人の言葉に「若い連中はわれわれより真理に遠ざかっているようだがわれわれにはない『何か』を持っていて優位に立っているようだ。」の場面は新しいものが古いものへ挑戦するかのようである。

また，この小説で教えられたことは，生きるということだった。それぞれの登場人物の生き方，考え方，

それに自分の生き方を比べてみると，バザーロフからは信念をあくまでも貫き通すファイトを，アンナ・セルゲエブナからはしっかりした考え方，アルカーデイ，カテリーナ等の人物からは貴族的な感傷を感じた。特にニコライペトローヴィッチのやさしさを感じた。彼はしかしむすこのアルカーディ同様，古い，いらない人間だという。

この小説はロマンチックの中に当時の社会的背景の新旧交代を訴えている。主人公バザーロフのニヒリストであるという点は，当時，新時代のすぐれた考え方だという見解と，そうでない見解があったようだが，私は，そのどちらとも正しいと思う。いまではそのバザーロフの説く，新しい考え方も，時代の流れによってより新しい変革を求められている。若さゆえにがむしゃらに走るのは危険が伴うし，古い考えにこびりついていたのでは進歩がないのである。両方とも一長一短のようだが，私は若い考えのほうがよいと思う。古い考えはもう作られてしまったものだ。しかし新しい考え方はこれから作るものであり，どんな風にも作ることができる。固定した考え方を持つという事は，それ以上の進歩がないという事だと思う。

アルカーディは素直で感傷的な好青年であると思う。けがれをしらないその性格は，だれからも好まれるものである。フェーニチカとのロマンスは新鮮で強烈な感覚を私にうえつけた。それと対象的にバザーロフとアンナ・セルゲエブナとのロマンスは深い，何かひそんでいてそれでいてしとやかな大人の感覚がした。アルカーディは成功したがバザーロフは実らなかった。そこには作者の意図する何かがひそんでいる。それはその小説が書かれた時代＝アルカーディ型の時代にそむけなかった現れであろう。たしかにその当時作品が発表された時は，バザーロフは危険思想だと非難されたのである。また，現在は，アルカーディ型にもどりつつある。私もロマン的な時代がすきである。

道しるべ

○去る10月15日，後期始業式の校長訓話で引用された話（医大入学の黒人優遇に関する白人受験生の提訴の判決に現れた，アメリカ社会における少数民族待遇の問題）。

「アメリカと日本」

読売新聞社発行　（近日入荷予定）

著者　江崎玲於奈（えさき・れおな）氏

（大14年大阪生。東大物理卒。昭33年 エサキ・ダイオードを発明。渡米ＩＢＭ特別研究員。昭48年 ノーベル物理学賞。昭49年 文化勲章。）

○以下のようなタノしみにこそ図書館は役立ちたいもの。　（館長）

「読書の愉しみ」　福原麟太郎

ねる前まで読んでいて，あとは明日にしようと残り惜しくも本を閉じ，あしたの朝を待つ心持で枕につくとか，外から家へ帰ってくるとき，帰ったら，あの本にすぐ取りつこうぜと心に思いながら，電車に乗っている，というようなことは，決して無くはない。私自身の経験にも，そのような時代があった。

今から思うと，どんな貧乏でも，どんなに辛いことがあっても，そういう時にその人は幸福なのである。小説，詩歌の本に限らない。無味乾燥と思える学問の書でも，そういう楽しい執着をもって，がむしゃらに読めるものである。

読書の愉しみというのはそれだ。それは生きることと共にある愉しみというものではないであろうか。

（故人　東京教育大学名誉教授
英文学者　・　随筆家）

友だちにも読ませたい本

第三回　2年生（56.11.7）

（注）○印は専門学科関係。書名の後の●印は再出のもの。

勧める人	書名	著者	発行所・文庫	理由・他
＜機械工学科＞				
菅波　政弘	○機械工作法(1)・(2)	堤　他	コロナ社	
阿部　隆寿	銀河のさすらい人	キース　ローマ	ハセガワ文庫	おもしろい
	明日の夢	小松　佐京	角川文庫	〃
青木　昇	蛍　川	宮本　輝	筑摩書房	
	天の夕顔	中河　与一		
荒木　寿一	1999年運命の日	チャールズ バリッツ	二見書房	おもしろい
磯辺　政幸	〃 ●			友に勧められた
岩沢　宏和	雀の卵（歌集）	北原　白秋	岩波文庫	おもしろい
	読者の世界	外山滋比古		〃
柿沢　哲也	1999年運命の日 ●			友に勧められた
木村　義則	山月記	中島　敦	岩波文庫	
小泉　弘幸	内蕩失人	五木　寛之	新潮文庫	
	○内燃機関	渡辺・黒沢	コロナ社	
	○流体機械	六角・横山	〃	
小林　晉	1999年運命の日 ●			
近藤　純一	友　情	武者小路実篤	新潮文庫	
佐藤　歩	光と影の花園	諸星　澄子	集英社	
	1999年運命の日 ●			
鈴木　幸夫	不可触領域	半村　良	角川文庫	
高橋　健	青春の樹	鈴木　孝雄	八幡印刷	
高橋　恭嗣	脂肪の塊	モーパッサン	新潮文庫	考えさせられる 絶対！
菜花　紀男	西部戦線　異状なし	レマルク	〃	戦争を考える
	マザーグース		講談社	おもしろい
古市　喜重	セーラー服と機関銃	赤川　次郎	角川文庫	〃
	蔵の中	横溝　正史	〃	感動する
古川　勉	科学的管理法殺人事件	森村　誠一	〃	これしかない
	変　身	カフカ	新潮文庫	なんとなく
藤沢　和彦	沖田総司　落花抄	森　満喜子	新人物往来社	一味違った新選組
	和　解	志賀　直哉	角川文庫	
矢田　栄	自由なる青春	富島　健夫	集英文庫	おもしろい
	西遊記　プラスα	豊田　有恒	〃	
渡辺　仁	潮　騒	三島由紀夫	新潮文庫	
	学問のすすめ	梅原　猛	角川文庫	
?	微分積分（I）	鈴木　行雄	福島高専	身になる
＜電気工学科＞				
池田　幸雄	エデンの戦士	田中　光二	角川文庫	壮大なスケール
	産霊山秘録	半村　良	〃	長編伝奇 SF
	神々の埋葬	山田　正紀	〃	すごい迫力
	俗物図鑑	筒井　康隆	新潮文庫	欲望とパロディ
歌川　純一	明治・父・アメリカ	星　新一	〃	当市出身の人

勧める人	書名	著者	発行所・文庫	理由・他
歌川　純一	科学・頭の体操	ヤゴルスキ	講談社	科学的一般常識
岡本　博文	Yの悲劇	E. クィーン	角川文庫	おもしろい
菅原　三男	赤と黒	スタンダール	新潮文庫	読みやすい
	初恋	ツルゲネフ	〃	
国武　弘之	吉里吉里人	井上ひさし	新潮社	絶対おもしろい
熊谷　中	れもん	梶井基次郎	角川文庫	難解な文章になれる
	○電気磁気の考え方・解き方		電気大	わかりやすい
熊谷　好市	セーラー服と機関銃　●			映画にヤックンが出る
	○ラジオの製作		電波新聞社	ためになる
河野　繁	ことばの人間学	鈴木　孝夫	新潮文庫	〃
	○電気磁気学	二村　忠元	朝倉書店	〃
佐々木　敦	世界史こぼれ話	三浦　一郎	角川文庫	読めば分る
	aoitoki	山口　百恵	講談社	いろいろ役に立つかも
須藤　昌弘	成りあがり	矢沢　永吉	小学館	ハウトゥビービッグ
	アメリカのありふれた朝	ジュディ　ゲスス	集英社	映画「普通の人々」
鈴木　智昭	三四郎	夏目　漱石	各文庫	生き方
	セロ弾きのゴーシュ	宮沢　賢二	新潮文庫	おもしろい
鈴木　啓修	貧しき人々	ドストエフスキー	〃	読むべし
	レ・ミゼラブル	ユーゴー	〃	
	ぐうたら生活入門	遠藤　周作	角川文庫	
添田　弘毅	虚人たち	筒井　康隆	中央公論社	実験的小説
	高熱隧道	吉村　昭	新潮文庫	死について
	アルジャーノンに花束を	ダニエル キース	早川書房	人間の心
	数学への招待	矢野健太郎	新潮文庫	数学のたのしさ
玉川　道昭	復活の日	小松　佐京	角川文庫	おもしろい
	ねらわれた学園	眉村　卓	〃	
門馬　文吉	ジャン・クリストフ	ロマン ロラン	旺文社文庫	
＜工業科学科＞				
会田　重一	ロビンソン漂流記	デフォー	新潮文庫	有名
相原　倫子	あなたとミルクティーを	みつはしちかこ	集英社	二重マル
	絹の瞳	サガン	新潮文庫	文章がきれい
粟野　博樹	七瀬ふたたび	筒井　康隆	〃	
	家族八景	〃	〃	
	エディプスの恋人	〃	〃	
穴沢　典子	いのちの初夜	北条　民雄	角川文庫	ひまつぶし
	アンナ カレーニナ	トルストイ	岩波文庫	〃
磐城　恵子	イリュージョン	リチャードバック	集英社	物質文明批判
	春一番が吹くまで	河西　蘭	河出書房	
	○分析化学便覧		丸善	ためになる
	○化学計量の解釈研究	島原・水原	三共出版	
石崎　文彦	新ハムレット	太宰　治	新潮出版	作者の性格
伊藤　忠	蛍川　●			おもしろい
小沢　寿哉	明治・父・アメリカ　●			
	アラスカ物語	新田　次郎	新潮文庫	
斉藤　則夫	車輪の下	ヘッセ	〃	受験を考えさせる
	シーシュポスの神話	カミュ	〃	心の糧（かて）
	こころ	夏目　漱石	各文庫	人間の心

勧める人	書名	著者	発行所・文庫	理由・他
斉藤　則夫	聊斎志異	蒲　松齢	角川文庫	おもしろい
	現代科学入門	アイザックス	ブルーバックス	ためになる
鈴木　淳	龍をみたか	三田　誠広	朝日新聞・角川文庫	芥川賞のパロディ
	時刻表の旅	種村　直樹	中公新書	旅が楽しい
	若き人々	武者小路実篤	角川文庫	
鈴木　雅博	Yの悲劇			
	カーテン	クリスティ	早川文庫	
	アクロイド殺害事件	〃	創元文庫	
高橋　和浩	橋のない川	住井　すゑ	新潮文庫	ためになる
	○重量分析	蓑目清一郎	共立出版	レポートに役立つ
新見　栄	イリュージョン	リチャード バック		すごくよい
	平家物語		角川文庫	おもしろい
	雑学事典		毎日新聞社	一般教養
	○ケムス化学	(アメリカ)	廣川書店	わかる
松野　裕一	死の家の記録	ドストエフスキー	新潮文庫	
山口　真	塩狩峠	三浦　綾子	〃	感動する
	蜩(ひぐらし)	谷村　新司	角川文庫	おもしろい
遊佐　寛	雑学　おもしろ読本		日本社	読めば知識人
	高校生日記	加藤　諦三	教元文庫	早大教授の青春
	○空気と人間	シンプソン	東京化学同人	
渡部　均	鉄筋の畜舎	森村　誠一	角川文庫	
	○元素と周期律	井口　洋夫	裳華房	化学のおもしろさ
＜土木工学科＞				
間　芳彦	あいつと私	石坂洋次郎	新潮文庫	
	なぞの転校生	眉村　卓	角川文庫	
秋山　裕久	異常の心理学	相場　均	現代新書	いい
	鍵のかかる部屋	三島由紀夫	新潮文庫	〃
磯原　良男	学生時代	久米　正雄	〃	
小野　裕樹	沈める滝	三島由紀夫	〃	
	うその心理学	相場　均	現代新書	
小野寺義則	あすなろ物語	井上　靖	新潮文庫	
	黒い雨	井伏　鱒二	〃	
大久保敏己	果心居士の幻術	司馬遼太郎	〃	
	黄いろい船	北　杜夫	〃	
完野　育政	狭き門	ジッド	〃	
	罪と罰　上・下	ドストエフスキー	〃	
	精神分析入門　上・下	フロイト	〃	
	人間の歴史	イリン	角川文庫	
今野　拓哉	両手で聖子	松田　聖子	旺文社	おもしろい
	もう一度　あなた	〃	ワニブックス	〃
佐藤　安正	青の時代	三島由紀夫	新潮文庫	
	罪と罰			
鈴木　浩	わがセクソイド	眉村　卓	角川文庫	
	滅びざるもの	〃	徳間文庫	
鈴木　洋一	新竹取物語　年女王	藤川　桂介	集英社	
鈴木　良之	老人と海	ヘミングウェイ	新潮文庫	なんとなく
	人生は野菜スープ	片岡　義男	角川文庫	おもしろい

勧める人	書　　名	著　者	発行所・文庫	理　由・他
鈴木　良之	○構造力学 (1)	宮原・高端	コロナ社	いつも使う
高萩　昭宏	20世紀最後の真実	落合　信彦	集英社	第二次大戦の真実
	ギリシア神話	呉　茂一	新潮文庫	
	オーパ！	開高　健	集英社	おもしろい
	帰らざる日々		角川文庫？	
	独学のすすめ	加藤　秀俊	文春文庫	ためになる
高木　正一	峠	司馬遼太郎	新潮文庫	〃
蛭田　建一	海と毒薬	遠藤　周作	〃	
	風　涛（ふうとう）	井上　靖	〃	
福地　和雄	病院坂の首縊りの家　上・下	横溝　正史	角川文庫	迫力がある
杉本　康則	野菊の墓	伊藤左千夫	旺文社	
桝内　信行	わが愛する山々	深田　久弥	新潮文庫	
室井　辰盛	ブンとフン	井上ひさし	〃	おもしろい
	射　程	井上　靖	〃	
渡辺　和彦	窓ぎわのトットちゃん	黒柳　徹子		誰にも読める

◇附　言◇　前号3年生に続く調査。今回も学級図書委員に用紙の配布と回収を託した。11月7日，回収数は M－23，E－15，C－17，土－20。次号は，真打ちとして5年生の予定。

学生諸君の要望にお答え

去る11月18日，学級委員長と教務委員会との懇談会があって，各学級でまとめられた諸要望が伝えられ，話し合われた。その中の図書委員会の関与する事項について，とりあえず見解を述べる。

1. 雑誌の入れ換えを早く　（5M）

以前にもこの声があり，今年度初，各書店の当館への持ち込み期日をチェックして実態を調べた。たまに例外的な遅れはあるが，それほどの「遅配」はなかった。今後も督励するが，具体例を示して訴えてほしい。

2. 辞書類をふやし，又，貸出しをさせよ　（5M）

多数学生が頻繁に使うべきものとして，辞書類は禁帯出とするのが図書館の常。大型で優れた（従って高価な）辞書を今後も閲覧室に出してゆく。中小型の辞書は個人が所有しなければまともな語学学習は無理でなかろうか。

3. 貸出冊数を3冊から5冊とし，期間を1週間から10日か2週間にせよ　（5C）

現行のきまりは，全国高専の大勢にも合っている様だ。又，卒業研究用には5冊まで1か月以内貸し出すことも御存知の通り。冊数と期間にどういう数値を入れたら本校の最大効率になるかは数学の問題でもあろうが，なお，この声に対しては，図書委員会で正式に知慧を集めてみたい。

種々の機会に図書館に注目し，意見を出してもらうのは望むところであるが，灯台下暗しにならぬよう，各学級図書委員が最も身近で有効な媒体となってくれるよう切望する。　（館長）

新着図書目録

✣印は図書館，他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総　記

朝日新聞縮刷版　昭和56年6月～9月号　朝日新聞社✣
福島民報縮刷版　昭和56年5月～8月号　福島民報社✣
学術雑誌総目録自然科学欧文編1979
1（A～I）2（J～Z）　紀伊国書店✣
福沢諭吉選集11　岩波書店✣
いわき市史11　近代資料II　下　いわき市✣
岡倉天心全集　別巻　平凡社✣
いわきの寺　いわきの寺刊行会
鈴木孝雄
青春の碑　鈴木孝雄✣
西井一郎
磨城の刀工と金工　刀剣春秋新聞社
草野日出男
雲場製伽井駅　はましん
華の御堂　同
人類の知的遺産
16　ダルマ　講談社✣
34　パスカル　同　✣
61　タゴール　同　✣
64　ガンディー　同　✣

哲　学

内村鑑三全集 5.12.14.18　岩波書店✣
ルソー全集14　白水社✣
神観念の比較文化論的研究　講談社
石毛直道
ヒトみな神の主食（Lecturebooks）　朝日新聞社✣
牧野力　ラッセル思想と現代　研究社
マンリー．P．ホール
カバラと薔薇十字団　人文書院
湖浜泰雄
日本人の宗教意識　名著刊行会
朱子学大系
6　朱子語類　明徳出版✣

歴　史

セオドア・ホワイト
歴史の探究　上・下　サイマル出版会
八田哲昌
ヴァイマルの反逆者たち　世界思想社
王仲荦　魏晋南北朝史　下　上海人民出版社
石河幹明
福沢諭吉伝 1～4　岩波書店
阿部謹也
中世の窓から　朝日新聞社
新潟一　地図の風景　福島・宮城・岩手　そしえて✣
同　富山・石川・福井　同　✣
同　中国編　山口・島根・鳥取　同　✣
角川日本地名大辞典
38　愛媛県　角川書店✣
明治文化史
4　総索引　原書房✣
日本歴史地名大系
18　福井県の地名　平凡社✣
日本の山河
33　天と地の旅　新潟　国書刊行会✣
41　同　福島　同　✣
日本歴史展望
5　分裂と動乱の世紀　旺文社✣
6　戦国武将の夢と知略　同　✣
7　天下びと信長から秀吉へ　同　✣
8　江戸幕府と三百諸侯の支配　同　✣

社会科学

昭和55年版　青少年白書　大蔵省印刷局✣
同　我が国の教育水準　同　✣
同　経済白書　同　✣
ミリタリーバランス　1980－1981　朝雲新聞社
問答式家庭の法律相談　新日本法規✣
科学研究費事務必携　ぎょうせい
国土庁編
防災白書　昭和56年版　大蔵省印刷局✣
経済企画庁編
経済白書　同　✣
外務省編
わが外交の近況　昭和56年版　同　✣
防衛学会編
国防用語辞典　朝雲新聞社
藤永保編
幼児の教育　講談社
上田薫編
教育とは何か　同
堀内守　芸術と教育　同
三枝孝弘編
学校と教育方法　同
長尾十三二編
教師の力　同
外山滋比古
ことばと教育　同
Z．ムリナーシ
夜家・プラハの春の悲劇　新地書房
山田晟　ドイツ法律用語辞典　大学書林

自然科学

化学辞典　森北出版✣
Journal の論文をよくするために　日本物理学会
英和和英生物学用語辞典　三共出版
昭和55年科学技術白書　大蔵省印刷局✣
土壌微生物実験法　養賢堂
絵で見る比較の世界　草思社
K．メンデルスゾーン
科学と西洋の世界制覇　みすず書房
林太郎　創造の化学　紫草房
感田義　信号処理の基礎と応用　日新出版
佐藤泰夫
弾性波動論　岩波書店
ルードウィヒ・ベック
鉄の歴史　1・2　たたら書房✣
ファースト
エントロピー　好学社✣
小川明　渦学　山海堂✣
加藤一郎編
動物のメカニズム　朝倉書店✣
中山泰喜
流体の力学　養賢堂✣
荻三二　熱伝達の基礎と演習　東海大学出版会✣
リシェフスキー
身近な力学　東京図書✣
小泉袈裟勝
単位のおはなし　日本規格協会✣
利岡靖　科学千一夜　ジャパンマシニスト社✣
科学技術庁編
科学技術白書　昭和56年版　大蔵省印刷局✣
P-Suppan
光化学の基礎　丸善
日本化学会編
化学便覧・基礎編 1～2　同
藤橋浩　燐的化合物の有機合成　三共出版
大河原信編
合成試薬　講談社
林知己夫
多次元尺度解析法　サイエンス社
R．N．シェーパード
多次元尺度構成法 1　理論編　三共出版
同　2　応用編　同
R．A．フィッシャー
研究者のための統計的方法　森北出版
小田中敏男
フーリエ解析と予測理論　槙書店
現代天文学講座
5　太陽　恒星社
初等情報処理講座
4　予測の知識　森北出版
新統計学シリーズ
1　数理統計学　培風館
2　実験計画法　同
4　統計のための数学 2　同
7　応用確率論　同
化学モノグラフ
20　有機光化学　化学同人
実験物理学講座
10　力学物性　共立出版✣
13　試料の作成と加工　同　✣
パークレ物理学コース
3　波動　上・下　丸善
ブルーバックス
463　科学論の体操　講談社✣
466　実践的高山植物街木検索小図鑑　同　✣
469　生物が一日一種消えてゆく　同　✣
470　相対論的量子論　同　✣
471　振動とはなにか　同　✣
H.B.Griffiths
Surfaces　Cambridge
Connections Curvature and Cohomology　Acadmic Press
Nutritionsl Requirements of Cultured Cells　学会出版センター
Bernard Pullman
Water and Metal Cations in Biological Systms　同
O.D.Anderson
Time Series Analysis　North Holland
Environmental Biology for Engineers　George Camougis
Ben Menahem

Seismic Waves and Sources
Springer Vrlag

工学・技術

土木技術フィルムリスト　1980　土木学会
コンクリート構造設計資料　技報堂
第1回破壊力学シンポジウム講演論文集
日本材料学会
鋳造技術講座　鋳造技術研究所
昭和58年度電子通信学会情報システム部門
全国大会講演論文集1・2　電子通信学会
昭和58年度電子通信学会半導体材料部門全
国大会講演論文集　同
新版公害防止の技術と法規・騒動編
産業公害防止協会
第25回材料研究連合講演会前刷集
日本機械学会
さびを防ぐ事典　産業調査会
昭和58年度電気四学会中国支部第32回連合
大会講演論文集　電気四学会中国支部
第14回電気絶縁材料シンポジウム予稿集
電気学会
日本音響学会昭和58年度秋季研究発表会講
演論文集1・2　日本音響学会
デ・ジタル画像処理　近代科学社
人工知能の基礎　同
管路ダクトの流体抵抗　日本機械学会
太陽エネルギー読本　3冊　オーム社
鉄鋼製造法　第4分冊　丸善
金属材料疲れ強さの設計資料1～3
日本機械学会
弾塑性破壊靭性JIC試験方法　同
統計的疲労試験方法　同
昭和56年度電気四学会九州支部連合大会講
演論文集　電気四学会九州支部
昭和56年電気関係学会四国支部連合大会講
演論文集　電気関係学会四国支部
第95回講演会機械構造物に対する破壊力学
応用の実際　日本機械学会関西支部
NEC.PC－8000シリーズ　ビジネス利
用のためのDISK・BASICプログラミ
ング教本　廣済堂
電気機械工学　電気学会
機械工学便覧　日本機械学会
集積回路応用ハンドブック　朝倉書店
トランジスタアンプの設計と製作
ラジオ技術社
新訂公害防止の技術と法規　騒音編
産業公害防止協会
昭和55年版　環境白書　大蔵省印刷局
ユーザーのための電動機実務必携
オーム社
空からの調査空中写真の判読と利用
鹿島出版会
航空写真のみかた　土木学会
橋 1979－1980　同
セラミックスの機械的性質　窯業協会
初めて情報処理技術者試験を受ける人のた
めに　オーム社
第2級無線技術士・無線従事者国家試験問
題解答集　電波振興会
昭和58年電気四学会連合大会講演論文集
56年10月　電気四学会
昭和56年度電気関係学会東海支部連合大会
講演論文集　電気四学会東海支部
昭和56年度電気四学会北海道支部連合大会
講演論文集　電気四学会
日本機械学会関西支部第41回特別講義会内
燃機関の熱効率向上テキスト
日本機械学会関西支部
衝撃と破壊調査研究分科会成果報告書
文献目録　1965～1978年　日本機械学会
F.P.ベア
工学のための力学　下　ブレイン図書
佐佐木巌
都市交通計画　国民科学社
平松啓二
図解マイコンのインタフエース　オーム社
国分明男
マイクロコンピュータ入門　同
松本欣二
コンピュータエレクトロニクス用語辞典
丸善
森下巌　パーソナルコンピュータ入門　昭晃堂
福葉吉弘
レベル3BASIC入門　アスキー出版
辻内順平
応用画像解析　共立出版
S.T.ロルフ
機械物における破壊と疲労の防止　培風館
原子力委員会編
原子力白書　昭和55年版　大蔵省印刷局
ヒューノラウン
英国建築物語　晶文社
吉瀬了介
ハイファイアンプの設計　ラジオ技術社
加藤清　6809ハンドブック　アスキー出版
ケネス・L・ボウルス
USCD PASCAL演習　工学社
横山亨　図解合金状態読本　オーム社
尾坂芳夫
コンクリートの品質管理入門　彰国社
S.V.モース
ル・コルビュジェの生涯　同
谷口雅有
河川工事施工法　山海堂
C.A.プレビア
境界要素法入門　培風館
境界要素法の基礎と応用　同
荒木睦彦
建設業のTQC入門　彰国社
朝香鐵一
建設業のTQC　日本規格協会
尾坂芳夫
土木構造設計法　技報堂出版
磯部昭二
電気機械設計法　開発社
小野茂　全員参加のコストダウンIE　技術評論社
山田敏郎
材料力学　日刊工業新聞社
中瀬明男
斜面および盛土のための安定図表
技報堂出版
堀越正雄
井戸と水道の話　論創社
金井寛他
電気磁気測定の基礎　昭晃堂
樽本雄一
図説電気工事士の実技　理工学社
高橋進一
信号理論の基礎　実教出版
小黒正樹
マイコン入門講座　廣済社
J.S.ベンダット
ランダムデータの統計的処理　培風館
中田孝　歪率とその検査　オーム社
寺尾宣三
破壊の秘密　法政大学出版局
環境庁編
環境白書　昭和56年版　大蔵省印刷局
B.ゴールド
電子計算機による信号処理　共立出版
川崎景民
オイルレス・ベアリング　アグネ
中條鎮一
新簡略製図法　テクノ
奥田忠四郎
新JISによる製図要覧
早稲田大学出版部
小野敏郎
機械設計の基礎　日新出版
内藤子生
飛行力学の実際　日本航空技術協会
工藤竹美
入門テクニカルイラストレーション
工業調査会
小栗富士雄
回転軸設計ガイドブック　共立出版
和田忠夫
精密メカニズム設計　テクノ
中野信琢
金属と鉄鋼材料　パーワ社
国浦行夫
演習水力学　森北出版
桜内雄二郎
物性からの技術ヒント　工業調査会
三輪茂雄
粉と粒の不思議　ダイヤモンド社
寺田浩詔
暮らしと機械の頭脳　講談社
ルードウィヒ
鉄の歴史Ⅱ　たたら書房
D.J.シューリング
構造実験の理論と応用　技報堂出版
C.A.プレビア
境界要素法の基礎と応用　培風館
鷲津久一郎
有限要素法ハンドブック　1基礎編　同
曽我直弘
初級セラミックス学　アグネ
杉田稔　マイコンによる機械制御技術
日刊工業新聞社
佐藤俊雄
油圧サーボ制御の設計　大河出版
小野栄一郎
改訂応用熱力学　産業図書
W.シューレ
工業熱力学本論　生産技術センター
松永省吾
工業熱力学入門　東京電機大学出版局
三橋孝　ターボ車の知識と特性　グランプリ出版
横起光広
わが青春の名車たち　同
大山豊　エンジンのチューニングアップ　山海堂
島村敏　初級フォートラン　コロナ社
津曲長一郎他
小形風車の実験と工作　オーム社
竹内洋一郎
熱応力　日新出版

吉本久泰
エンジニアのための絵ときマイコンソフトウエア　オーム社☆
細井勉　FORTRANによるプログラミング入門　産業図書☆
大橋鎮弘
鉄道路盤構造　調査　設計　施工　同　☆
F.P.ベアー
工学のための力学問題解説　上・下　ブレイン図書
新体系土木工学
18　土の力学Ⅲ　技報堂出版☆
19　同　Ⅳ　同　☆
37　構造用鋼材　同　☆
86　環境保全（1）　同　☆
87　同　（2）　同　☆
97　契約・積算　同　☆
機械工学大系
36　切削加工　コロナ社
音響工学講座
2　応用電気音響　同
標準機械工学例題演習シリーズ
3　機械工作例題演習　同
新編機械工学講座
14　機械工作法　同
15　同　同
現代測量学
1　測量の数学的基礎　日本測量協会
ブルーバックス
439　模型からの発想　講談社☆
464　新しい植物学　同　☆
465　ラジオモータリングホビー　同　☆
S.W.Freiman
Fracture Mechanics Applied to Brittle Materials　SFP
D.R.J.Owen
Numerical Methods in Fracture Mechanics　Swansea UK
Hira N. Ahuja
Successful Construction Cost Control　Wiley Interscience
Knut Winter
Erläuterungen Zu Din 1080　Verlag Von Wilhelm Ernst
Sydney F. Love
Planning and Creating Successful Engineered Designs　Van Nostrand Reinhold

産　業

通商産業省
通商白書　昭和56年版　大蔵省印刷局☆
同　昭和58年版　各論　同　☆
国土庁編
国土利用白書　同　☆
J.I. ロデイル
有機農法　農山漁村文化協会
S.W. Buol
ペドロジー　土壌学の基礎　博愛社

芸　術

書の本　Ⅲ書の楽しみ　筑摩書房
武満徹　音楽の余白から　新潮社
P.V. カルポビッチ
新版運動の生理学　ベースボールマガジン社
J.G.P. ウイリアムス
スポーツの医学　同
H. ハリソン・クラーク
保健体育への測定の活用　同
トニーネット
陸上競技者の筋力トレーニング　同
ブルーバックス
468　釣の科学　講談社☆
浮世絵聚花
9　ミネアポリス美術館　ポーランド美術館　小学館☆
日本古寺美術全集
7　四天王寺と河内の古寺　集英社
9　神護寺と洛西洛北の古寺　同

語　学

英文用例事典　文法　日本図書ライブ
現代人のための最新ことばの知識百科　主婦と生活社☆
英和中辞典　旺文社
エドワード・G・サイデンステッカー
日米口語辞典　朝日出版社
ドナルド・キーン編
*未英俗語辞典　同
井上ひさし
私家版・日本語文法　新潮社
レイモンド・ウイリアムス
キイワード事典　晶文社
L.R. パーマー
現代言語学入門　研究社
T.A. シービオク
シャーロックホームズの記号論　岩波書店
浜内正人
角川類語新辞典　角川書店
新釈漢文大系
33　春秋左氏伝　四　明治書院☆
48　戦国策　中　同　☆
Eric Partriage
A Dictionary of Catch Phrases　PKP
Macmillan Contemporary Dictionary　Macmillan Publihing
Oxford Duden Pictorial English Dictionary　日本出版貿易
English Pvepositional Idioms　Mocmillan
The New Method English Dictionary　Longman
Picture It / Sequences for Conversation　Regents
Donal R.H. Byrd
React Interact Situations for Communication　同

文　学

世説新語補　上・下　青文書局
世説新語　同
青行理也
小さな貴婦人　新潮社
筒井康隆
虚人たち　中央公論社☆
井上ひさし
吉里吉里人　新潮社☆
五木寛之
青春の門　堕落篇　上・下　講談社☆
黒柳徹子
窓ぎわのトットちゃん　同　☆
青島幸男
人間万事塞翁が丙午　新潮社☆
ノースロップ・フライ
T・S・エリオット　清水弘文堂
高橋康也
ウロボロス　文学的想像力の系譜　晶文社
W. サイファー
文学とテクノロジー　研究社
黒井千次
春の道標　新潮社☆
想像の翼　スウィットの科学と詩　山口書店
ジョージ・サンプソン
ケンブリッジ版　イギリス文学史 1～4　研究社
ロマン・ロラン全集
1　ジャン・クリストフ 1　みすず書房☆
2　同　2　同
3　小説Ⅲ　ジャン・クリストフ　同　☆
4　同　Ⅳ　同
新潮現代文学
11　富夫人絵図　好きな女の腕飾り　新潮社☆
14　いやな感じ　死の潮より　同　☆
37　島　抱擁家族　同　☆
53　化石の森　太陽の季節　同　☆
74　夢の碑　真実の学校　同　☆
日本詩人選
30　雪国山　筑摩書房☆

寄贈図書紹介

このたび下記各位が，図書を寄贈して下さいました。厚くお礼申し上げ，末長く図書館に備付けて活用させていただきます。

鈴木孝雄 殿

青春の樹　鈴木孝雄

永山嘉昭 殿

実践テクニカルイラストレーション　日刊工業新聞社

和同会 殿

土屋省三

私は見た色盲が治る事実を　高木書房

仮性近視と色盲治療　KKダイナミックスセラーズ

佐藤和郎 殿

佐藤和郎論文選集　佐藤和郎先生論文刊行会

NHKいわき放送局 殿

NHK年鑑　Radio & Television　Yearbook 81'　日本放送出版協会

特定研究光導波エレクトロニクス総括事務局 殿

光導波エレクトロニクス　文部省科学研究費特定研究

内閣総理大臣官房広報室 殿

昭和56年日本の白書　清文社

綜合警備保障株式会社 殿

村井順　日本人の良心　善本社

福島県文化センター 殿

福島県文化要覧　福島県文化センター

東洋経済新報社 殿

塚越則男

図説日本の財政　東洋経済新報社

石油化学工業協会 殿

石油化学工業20年史　石油化学工業協会

富士物産 殿

柏忠二　コンクリートの非破壊試験法　技報堂

日本石鹸洗剤工業会 殿

油脂石鹸洗剤工業史　日本石鹸洗剤工業会

読んでみませんか

913.6　「人間万事塞翁が丙午」

青島　幸男　新潮社　（直木賞）

仕出し弁当屋をとりしきる下町っ子ハナをめぐる，戦中から戦後の，笑いと感動をさそう「庶民の昭和史」。

810.4　「私家版日本語文法」

井上ひさし　新潮社

かた苦しい文法が身近なものとなる空前の言葉の教室。日本語の豊かな魅力を爆笑のうちに体得させる。

当館の歩み

56.9下～11下旬

10.20　ビブリア第44号を発行

11.5　友達にも読ませたい本（2年生）アンケート用紙を学生図書委員が配った。

11.7　同上用紙を学生委員が回収した。

11.9　第5回図書委員会

① ビブリア45号編集案

② 希望図書購入の流れの調整

11.11　ビブリア特別号の製本作業を1～3年図書委員が行なった。

11.12　同上を発行，1～3年生に配布した。